# [key] Angelbeatｓ！　～ｉｎｔｒｏ～[二次創作]

エルメス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

［ｋｅｙ］　Ａｎｇｅｌｂｅａｔｓ！　～ｉｎｔｒｏ～［二次創作］

【Ｎコード】

Ｎ１１３３Ｏ

【作者名】

エルメス

【あらすじ】

Ｋｅｙ原作のアニメ「Ａｎｇｅｌ　ｂｅａｔｓ！」の二次創作小説。

～～～～

―それはＳＳＳと名乗る集団が旗揚げされるよりももっと昔のお話―

男は人間だった。だからこそＡｎｇｅｌｐｌａｙｅｒを作り上げた。

悠久なる時の流れに身を任せ、再び彼女が現れることを祈って。

そして彼は託した。

願いを叶える力を欲する一人の人間に。

〜〜〜

## ～Ｉｎｔｒｏ～（前書き）

Ａｎｇｅｌｐｌａｙｅｒがなぜ生まれたのか、プログラマーは誰なのか。

大人気アニメ「Ａｎｇｅｌｂｅａｔｓ！」の謎を解決するようなＳＳを書いてみました。

## ～Intro～

男は目覚めた。

辛酸を口に突っ込まれたような息苦しさと不快感に吐き気を覚えながら、それから逃れようと思わず椅子から立ち上がる。そんな男を一体全体何事かと見つめるクラスメイト達と教師。彼は教室の真ん中、授業中にマヌケにも自席から立ち上がっていた。

「あー、なにをしとるんだ。お前は。」

「えっ、あっ。す、すいません。」

たしなめるような教師の言葉にクラスメイトはくすくすと笑い、その状況に赤面しつつ彼は着席しようとする。だが、

「あー、立ったついでだ。次の段落から読め。」

教師の言葉によって中腰での静止を余儀なくされ、その慌てた表情にクラスメイトはまた笑いをこぼす。その恥ずかしさにより先ほどの飲み下すことも適わない辛酸の不快感は露と消える。

男は教師の言う通り教科書を手に取り、段落の先を読み進める。二、三度読み間違え、その度に誰かが笑ったのが聞こえたが、知らない振りをした。一段落読み終え、やっとのことで席につく。立ち上がって、今までかなりの時間が経っているような錯覚と言いようも無い安堵感が彼を包む。

『それにしても…。』

彼は目の前の、たった今読み上げた教科書を見る。…馴染みの無いものだった。
おもむろにそのページを閉じて、背表紙を見る。そこにはご丁寧に自分の名前が入っていた。…そこに確かに書いてある自分の名は、自分の筆跡では無かった。
彼は自分の名前が書いてある、だが自分の物とは到底思えないそれから目を離し、視界をぐるりと教室へと移す。

教師が弁を奮う黒板をノートへととっていく女生徒、窓の外で緩やかに形を変えながら流れていく雲、壁に貼り付けてある何かの掲示物、指で器用にペンを回している男子生徒。視界に写るすべてのものに見覚えが無かった。

『ここは…どこなんだ?』

困惑のまま授業が終わり、休み時間になる。今まで真面目に授業を受けていた生徒たちは皆、談笑に花を咲かせたり次の授業の用意をしたりと思い思いの時間を過ごしている。彼は自席から立ち上がり、校舎の隅から隅まで、自分の記憶と合致する何かを必死に探した。

「おかしい…。なにかが、おかしい…。」

とてつもなく広い学校の敷地が見渡せる屋上で、彼は欝蒼と茂る森と晴れ渡る空が交わる遠い遠い地平線を睨みながら言った。

〜〜〜

マンモス校、と呼ばれるに値する広い校内を見て回るにはそれなりの時間を要し、彼が教室に戻る頃にはすっかりお昼になっていた。

外から見ると体育館なのではないかと思われる広さを誇る食堂で、彼は一人肉うどんをすする。よく覚えていないがどうやらクラスメイトらしい生徒に、一緒に食事を取らないかと誘われたが丁重に断った。

午後。彼は大人しく授業を受けていた。なにがおかしいのかわからない以上、闇雲に動いても体力と時間を浪費するだけだった。

〜〜〜

とりあえず、一日のカリキュラムが終了し放課後になる。彼は次、自分が何をすればいいか判断しかねていた。校庭では陸上部やサッカー部、野球部などが練習を始めていたが、自分がそのような部活に入っていた覚えは無い。帰ろうか、と思ってもどこへ向かえばいいかわからない。

少しずつ人の気配が少なくなっていく校舎の中で、彼は不安を感じていた。と、そこへ。

「キミ、帰らないの？」

廊下と教室を隔てるドアに手をつき、一人教室に残り呆けている彼に女生徒が話しかけてきた。表情はよく伺えない。

「帰るって、どこ行けばいいんだ？」

「どこって…自分の部屋に、だけど。」

「部屋？」

「そ。寮の自分の部屋に帰って、また明日。…じゃね。」

「あ、あぁ。ありがとう。」

女生徒は踵を返して、教室から出て行った。

「…、じゃあ、帰るか…。」

彼は教室を出る。すでに廊下には誰もいなかった。

〜〜〜

「ここ…か？」

寮の受付で確認してはみたものの、やはり覚えの無いドアの前に彼は立っていた。どうやらルームメイトがいるらしく、第一印象は悪くないようにしなさいと伝えられたのを思い出す。

カチャリとノブを回し、ドアを開ける。広くも狭くも無い部屋に、2段ベッドが1つ、机と椅子がそれぞれ1つずつ壁に向かって並んでいて、奥にはベランダ。角部屋ではないので、窓はベランダへと続くその1つだけ。

質素、もしくは簡素。その言葉がよく似合う部屋だった。

よく言えば飽きの来ない、悪く言えばシンプルが過ぎるランプシェードからこぼれる煌々とした蛍光灯の光。そもそも鍵もかかっていないのに現在の部屋の主は居なかった。

ルームメイトになるとはいえ、誰もいない部屋に入るのは少し忍びない。彼はドアを閉めようとする。そこに。

「あぁ今日来るルームメイトって君のこと？」

「っ！！」

後ろから突然声をかけられ、驚きつつ振り返る。そこにはよく言えば温厚そうな、悪く言えば気の小さそうな男が立っていた。その部屋の主だった。

「あ、あぁ。」

「そう。じゃあ立ってるのもなんだから、中入りなよ。今日からここは君の部屋なんだから。」

部屋に入り、ドアを閉める。よりいっそう狭く感じたが何も言わなかった。

簡単な自己紹介をする。彼は“天野（あまの）　はじめ”と名乗った。部屋の主は“森本”と名乗る。

「天野君だね。よろしく。」

「こちらこそ。」

〜〜〜

その後、先ほどの食堂で夕飯を食べ、案内された浴場でシャワーを浴びる。

部屋に戻ってきて、割り当てられた二段ベッドの上側に陣取り、横になる。落ち着いて今日を振り返ってみた。

『ここはどこなんだ…。起きたら、教室にいて…でも見覚えがなくて。わけがわからない。夢の中なのか…？』

試しに自分の頬をつねってみるが、もちろん痛い。

『はぁ…意味わかんね。』

目を閉じるとすんなりと眠りに落ちてしまった。

〜〜〜

次の日。

ルームメイトである森本に起こされ、起床。少し急がないと遅刻するよ。との言葉を残し、先に出て行ってしまう。後を追った。

〜〜〜

教室に着き、自席に座る。昨日よりは少し居心地がよかった。

彼はいろいろ疑問に思ったが、普通に授業を受けて過ごした。

〜〜〜

それから何日か経ち、彼はすっかりクラスに溶け込んでいた。最初に感じた違和感はとうに気にならなくなり、むしろなんでそんな違和感を抱いたのか、そっちのほうが疑問だった。

それほどに彼は穏やかに日々を過ごしていく。

だがそれが壊れたのは唐突だった。

〜〜〜

## ～The Show Must Go On～

『こいつら…、人間じゃない…？』

そんな疑念が頭をよぎった。頭をゆすって、その馬鹿げた考えを振り落とそうとするが、その猜疑心は消えない。

『なんで…、こいつらこの前と同じ行動取ってるんだ…？』

それはまさしく、ＲＰＧの世界で主人公である勇者が話しかけない限りアトランダムに歩き回る街の住人のようだった。

彼の思考に恐怖の二文字がぞわりと浮かび上がる。昨日まで普通に話していた人間が、急に人形に摩り替わったような錯覚。彼は脂汗を額に浮かばせながら、慌てて席を立つ。

その彼にかけられる教師の一言。

「あー、なにをしとるんだ。お前は。」

内容、イントネーション、アクセント、スピード。どれをとっても先日のそれとまったく変わりない教師の言葉。違うのはそれを聴いた、肩で呼吸をする彼のその態度。彼はぬるく感じる空気を一息吸うと、力の限り叫んだ。

「なんなんだ！お前らは！ここは、一体どこなんだあぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

彼は机を弾き飛ばして、その場から走り出した。言いようもない恐

怖から逃げるのに必死だった。

授業中なので、躍り出た廊下は彼の独壇場だった。それゆえ、騒ぎを聞きつけ駆けつけた体育の教師によって彼はいとも簡単に羽交い絞めにされ捕まってしまう。彼の逃走劇は早くも終わりかと思われた。だが彼は教師の腕の拘束を振りほどき、走りだした。フレディもジャックザリーパーも今の彼にとっては恐怖でもなんでもない。ただ、目の前にいる人間の形をした木偶人形が怖くて仕方なかった。

昇降口に続く階段は、つまり目の前の階段は、立ちはだかる教師によってふさがれている。彼は「ちぃっ」と悪態をひとつつき、踵を返す。上履きの底が摩擦できゅいっと緊迫感のない音を立てた。彼の必死な足音が廊下を駆けていく。

肺の中に新旧の空気が入り混じり、うまく呼吸が出来ない。時々、変な咳をこぼしながらなおもタイル張りの廊下を走る。窓の向こうの森がゆっくりと平行に移動していくようだった。

息も絶え絶え、いきついた先は行き止まりだった。慣れてきたとはいえ、学校内のすべてを網羅しているわけではなかった彼はいとも簡単に袋の鼠状態になる。迫り来る教師の目に映る彼の瞳は、窮地に置かれて怯えているはずのそれとはまったく異なって、一片の濁りもなくぎらりと光る。

「でぇやぁぁぁあああ！！！！！」

彼は、廊下の最後の壁にしつらえてある窓を叩き割った。ひとつの枠に囲まれた薄いガラスはいとも簡単に砕け、その破片は外に散らばり太陽光を浴びてきらきらと光った。

「な、なにをしている！？」

彼は砕けたガラスの一片を握り締めていた。直角三角形の出来損ないのようなそれを血が滴るのもいとわずに握る。不意にその口元に笑みを浮かべ、立ちふさがる教師に向かい、突進した。

「うがぁあああああ！！！！！！」

客観的に見ればどう見ても彼が精神を触れてしまい、半狂乱に暴れているようにしか見えない。だが彼は真剣にそのガラスの剣を振るっていた。

横に凪いだ一閃は教師のジャージを掻っ捌き、薄い出血を促す。一瞬怯んだところに肩からのチャージを食らわせ、床に散った血液の水玉に足を取られ、面白いように教師は転んだ。彼はその教師の上半身にどかりとのしかかりマウントポジションを取る。そして喉元にガラスの刃を突き立て、構える。斜線ＡＢは赤い液体を滑らせて、教師の喉に赤く点を作る。それはさながら、長距離狙撃用のライフルのレーザー照準だった。

「…バカなことはやめるんだ。」

テンプレートのような教師の言葉を聞いて、彼はにやりと笑う。犬歯が怪しく光る。

「ははは、やっぱりな。」

『この世界の人間はテンプレートどおりの行動を取る』という彼の思考からのそのセリフなのか、はたしてその言葉が何を意味するのかは彼にしかわからない。

彼は一度、ガラスの剣を振り上げる。

彼の思考に、木偶人形を殺したらどうなるのか。この世界はどうなるのか、その出かたを見るという考えはなかった。ただ、自分の前に立ちふさがる敵を排除してこの場から、この世界から逃げたかった。

息を止める。時間は一瞬。彼が覚悟を決めるのに必要な時間。

彼はガラスを握りなおし、重力の加速度にそれを任せる。少し後を押すように力を込めて振り下ろす。

一瞬の風切音。

彼は、無様にも壁にぶっ飛ばされていた。

衝撃で手放してしまったガラスの剣は床で割れて、四方へ飛び散っていた。

「ぐあ…、なんだってんだ…。」

「おふざけはこの辺で終わりよ。」

倒れながら呆気にとられている教師と、こめかみを思いっきり蹴飛ばされ倒された彼のその間に、一人の少女が立っていた。割れた窓ガラスからそよりと入り込んだ風が、軽くスカートを揺らす。

「お前…何だ。こいつらの仲間か…？」

こめかみを押さえて、うずくまる。それでも彼は獣のような鋭さを保ちながら少女を睨み付ける。

「人間。そして、いいえ。」

彼女は彼の質問に忠実に答えた。

「じゃあそこをどけ。俺はこの世界から逃げる。邪魔をするならお前も容赦しない。」

のそ、と立ち上がる彼を嘲るように微笑み、言う。彼女に彼を小馬鹿にする意思が無かったとしても、彼にはそう見えていた。

「この世界から逃げることは出来ないわよ。あるがままを受け止める、それしかないの。」

諭すように彼女は言った。だがその一切を聞き入れることなく、彼は吼える。取り残された教師だけが、固まっていた。

「ふざけんな！こんな狂った世界、受け入れられるか！」

地団駄を踏むように、地面を蹴飛ばす。その衝撃で、かろうじて窓枠にしがみついていたガラスの破片が床に落ちて砕けた。

「受け入れられるか否か。ではなく、受け入れるしかないのよ。そうすれば――」

「黙れ！！！俺は逃げるんだぁあああ！！！」

神経を逆撫でるような彼女の物言いに彼は逆上した。言葉を遮り、

叫ぶ。剣を持たない裸の剣士となった彼は何の考えも無く、彼女に突進した。

「やれやれ…やっぱりこうなるのよね…。お願いします。」

「あいあいさー。」

彼女の言葉に、緊迫感がわずかも感じられない返事をして、ぬっと姿を表したもう1人の人間。その手には包丁が1つ握られていた。

包丁を握った人間は、すっと彼女の前に立ち包丁を構える。彼は少女を突き飛ばす為に肩を突き出して突進してくる。それにあわせて、すり足で半歩踏み込む。

ぐしゅ。

無防備な喉に包丁が突き刺さっていた。彼の心臓の鼓動に合わせて、深紅の血液が脈動して吐き出される。刃を伝って落ちるその雫はぼたりぼたりと床に鮮やかな水玉を描いて、猟奇的な空間に拍車をかけていく。

…なにをす…る…？

そのセリフは言葉にならず、大きな泡となって彼の喉元を汚した。喉を駆け上ってきた鉄の味は開いた口の端からだらしなく落ちていく。吐いた血を手でぬぐい、その温もりを再認識する。奥歯がカタカタと音を立てだした。

網膜が少しずつ開いていく。その生物的反応とは異なり、彼の視界は周りから徐々に闇に包まれていった。「ブラックアウト」と呼ば

れ、脳に血液が届かない時に発生する現象の１つ。

命を失いつつある彼の姿に、今は包丁を離した人間は背を向け苦々しい顔を作り、彼と対峙していた少女はその様子を一瞬も目を離すことなくじっと見つめていた。

彼は手を伸ばす。ガラスで幾度となく切れたその表皮は赤黒く濡れ、かたかたと細かく震えていた。過呼吸のように浅く早い呼吸を繰り返しながら、彼は少女の肩を掴む。ブレザーの肩口が赤く染み付いたが、彼女はその手を払おうともしない。

まっすぐ見つめてくる彼女を忌々しくうつろに睨みながら、彼は一度大きく息を吸おうとする。だが、気管に流れ込んだ血液はそれを許さず、大きく咳き込む。

「げがほっ、がぁ…。」

鮮血が彼女の制服を汚す。

びちゃり、と大きな雫が落ちる。

ぐらりと白目を剥く彼に少女はゆっくりとこう言った。

「…大丈夫、あなたは死なない。いいえ、死ねないのよ。」

どしゃ、と彼の体が崩れ落ちる音がした。

## ～Eat Me Alive～

「はっ！」

彼、天野はじめは目覚めた。

そこは保健室。真っ白い天井と薄い水色のカーテン、清潔なベッド。

2、3回大きく目を瞬いてから、喉元を探る。包丁が突き刺さっていたその首は確かにつながっており、傷一つ無い。彼は大きく安堵のため息をつく。

「夢…？最悪だな…、危うく首を切り落とされそうになるなんて…。」

彼はベッドから降りる。なぜか上半身裸だった。

「え、あれ？なんで？」

ベッドで裸になる用など彼にあるはずも無く、ひたすらに混乱する。寝てる隙に脱がされ、なにか悪戯をされていないかと不安になった。なぜか胸を隠すような仕草をして、膝から崩れ落ちる。

「ま、まさか…そんなわけないよな。俺みたいな男を誰がそんなことするってんだ…。」

口ではそういうものの、顔は脂汗で一杯だった。

彼が自分の貞操の危機に頭を悩ませていると、がらりと保健室のドアが開いた。

「あら、お目覚め？おはようございます。」

狂乱した彼の前に立ちはだかった少女がそこにいた。彼の血で汚れたはずの制服はその痕跡をまったく残していない。袖口が紺で、全体がベージュのブレザーに、ブラウスにくすんだ金色のループタイを結ぶ。黒いプリーツスカートに白いソックスを履いている。全校生徒の半分、つまり女子生徒の制服を隙なく着ていた。

「あ…。あんたは…。」

彼の脳裏にざぁっと記憶が蘇える。混乱して暴れ狂った自分、ガラスの砕ける音、教師の言葉、こめかみの痛み、確実に突き刺さっていた包丁の感触、血のぬくもり。

血の気が引くのがわかった。

「あなたは、死にました。でも、今ここに立っている…。さてなぜでしょう？」

なぞなぞを出すように、人差し指で天井を指しながら彼女は言った。きゅ、きゅ、と上履きのゴムが擦れる音がする。

「…、き、奇跡が起きたから。」

「不正解。」

「…実は血糊だった。」

「不正解。」

「……。」

「不正解。」

「いや、何も言ってないし…。」

「じゃあ答えて。」

「…、んなもんわかんねぇよ。」

「…、あなたは死にました。…これが正解。」

彼は彼女を馬鹿にするように肩をすくめる。

「はぁ？俺が死んだって？じゃあここにいる俺はなんなんだ？幽霊か？ここが死後の世界だとでもいうのかよ？」

「……。」

「お、おい。なんか言えよ。不正解とかよ。」

「正解。ここは死後の世界。名前はわからないけど、そういうことなの。」

「はぁ！？ふざけんなよ！」

激昂する彼と相反して彼女は冷静だった。少しだけ、諦観したような視線。

「…ふざけてなんて、ないわ。」

「じゃあ何で俺は死んだんだよ？まさかあの包丁で殺されたんじゃないだろうな？」

「…、違うわよ。あなたはこの世界に来た時点ですでに死んでいる。…思い出して？死んだときの記憶があるはずだから。」

「え…。」

彼は目を閉じ、考えてみる。この世界に来る前のことを。

「…思い出せない。」

「…あなたの名前は？」

「天野はじめ。」

「思い出せないのは死んだ瞬間だけかしら？」

「あぁ…ほかはぼんやり覚えてる…ような気が、する。」

「じゃあ事故死かもしれないわね。事故のショックで記憶が飛ぶ、というのはよくあることでしょう？」

「まぁ、そう聞いたことはある。」

「じゃあそういうこと。」

「そういうこと、かよ…。」

「はい。」

「…。」

「…とりあえず、服を着て。制服はそこに。」

「え？…あぁ。」

血みどろになったとは思えない清潔な制服が机の上に畳んで置いてあった。Ｙ　シャツと女子と同じくすんだ金色のループタイ。ちなみに男子はそれを結ばない。そしてなぜか女子はブレザーなのに、学ラン。

彼はそれを着込むと振り返る。彼女は反対側を向いていた。

「着ましたよー。」

「はい。…じゃあ行きましょうか？」

「…どこに。」

「…おなか、空いてないの？」

「えっ？」

その瞬間。

ぐぅ〜。

間の抜けた音が部屋に響く。彼女はくすっと笑った。

「ほら、だから言ったじゃない。食堂へ行きましょ？」

「あぁ…。」

どこか恥ずかしそうな顔をしながら、彼は少女の後を追った。

〜〜〜

彼はカツ丼とラーメンの食券を握り、少女は肉うどんの食券を持っていた。それを食堂のおばちゃんに差し出し、各々の料理を持ってテーブルに着いた。

「いたあきまふ。」

言うが早いが、彼はカツに食らいつく。よほど空腹だったのか、箸のスピードが尋常じゃなかった。少女はその速さに呆れか感心かわからない顔をして、話しかける。

「食べながらでいいから聴いて。この世界のことについて、よ。」

彼は少し食べるスピードを落とす。掻きこむ丼の縁越しに彼女と目線が合った。

「この世界は死後の世界。この世界にいる限り、肉体の老いと死はありえない。いわば不老不死というやつね。」

彼は丼ごとうんうんとうなずいた。少女はそれを確認して続ける。
「そして、この世界には2種類の存在があるわ。それは人間とＮＰＣと呼ばれるものたち。」
「ＮＰＣ？」
卵で黄色く染まった米粒を頬に付けたまま、彼は聞いた。
「うん、ノープレイヤーキャラクター、の略。ＲＰＧの村人みたいな存在といえばわかりやすい？」
「あぁ、あの木偶人形達か。やっぱり人間じゃないんだな。」
「木偶人形とは言い得て妙ね。あれらは人間じゃない。」
「なんで、そんなものがいるんだ？」
「私たち人間がこの世界に来たときにすんなり自然に学校生活に入れるように振舞うため、ね。行動は模範的で、会話も成り立つわ。一見人間とは変わらないけど、いかんせん人間らしさが無いのよ。」
「あんたは、人間だな？あと、俺に包丁を刺した奴。」
「うんもちろん。この世界では突飛な行動をするのが人間で、そうじゃないのがＮＰＣ。」
「で？それがどうしたと。」

彼は聞いたが、彼女はそれを無視して続ける。

「はじめ君。あなたは死んだときの記憶が無いって言ってたけど、ほかの部分は覚えてる？」

「…あぁ。」

「それは、人に聞かせたら羨まれるような人生だった？その人生は立派で満足のいくものだった？」

まっすぐな視線を、まっすぐ見つめ返す。彼はゆっくりと首を振った。

「いや…、まったく。つか事故死なんだから未練たらたらだな。」

「…、この世界はその未練を晴らすために存在している。」

「…は？」

信じられない、なにを言っているんだ、という表情で彼女を見る。その顔に、冗談を言ってるような素振りは少しも無い。

「この世界は私たちが生きているときの未練を晴らすため存在している」

「…。」

「この世界は私たちが生きているときの未練を晴らすため存在している。」

「あ、いや…。」

「この世界は私たちが生きているときの未練を晴らすため存在している。」

「もうわかったって！」

「なら良いんけど。」

「…じゃあその未練が晴れたら？」

「…、未練が晴れたら、この世界にいる意味はないわ。…つまり。」

「…つまり？」

「消えるの。跡形もなく。」

「…マジかよ。」

「うん。早い話が成仏ってやつで。…ラーメンのびるわよ？」

「あ、あぁ。」

彼は少々スープが減っているラーメンに手をつけ始めた。生のままの刻みネギをスープに沈ませる。

「さっき言ったように、この世界には未練のある人間が集まるようになっている。そして、肉体は何をしても死なない。つまり未練が晴れるまで、この世界からは逃げられない。」

「ふむ。」

「というわけで、成仏しましょ？はじめ君？」

「…はい？」

「というわけで、成仏しましょ？はじめ君？」

「いや…。」

「というわけで、成仏しましょ？はじめ君？」

「だから何回も同じこと言わなくていいっつーの！」

「そう？いまいち理解してくれてないように見えたから。」

「まぁおいそれと理解は出来ないな。成仏なんて言われても…。それにあんたのこと１００％信用してるわけじゃないし。」

「え？」

「…あんたのこと１００ぱ」

「あぁ何回も言わなくていいわよ。」

「…このアマ…。」

「まぁ信用するしないはこれから決めてくれていいから。とりあえずこれ食べたらみんなを紹介するわ。」

「みんな？」

「そ。あなたと同じようにここに来た人間。」

「探したのか？」

「ううん。大体の人はあなたみたいに何かしらのアクションを起こすから。そしたら説得して仲間になるってわけ。」

「ふーん…、あんたの界隈では包丁で人の首を貫くことが説得って言うのか。」

「早く食べないと予鈴鳴っちゃうわよ～。」

「このアマ…。」

ふたりは黙々と麺をすする。

～～～～

## ～Welcome To The Black Parade～

～～～～

「というわけで紹介します。天野はじめ君です！はい拍手！」

ぱちぱちぱち、とまばらな拍手が教室に響く。８人ほどが集まっている教室の黒板の前で、少し恥ずかしそうなはじめが椅子に座らせられている。

「…これはなんの辱めでしょうか…。」

「え？みんなに紹介するっていったでしょ？聞いてなかった？やっぱり何回も言ったほうがいいじゃない。」

「それはわかってたけどよ…まさかこんな転校生紹介みたいにされるとは…。」

「まぁ転校生みたいなものだし。あながち間違ってはいないわね。」

「…そうかよ。」

「で、彼が新しい転校生？」

はじめと対面する８人のひとり、長いポニーテールが特徴の女子が彼を指差して発言する。

「そ。岡本くんはわかってると思うけど、この前先生にマウントポジションとって刺し殺そうとしてた生徒。」

岡本、と呼ばれた男子がふい、と顔を背ける。はじめは彼が自分を刺した人間だとわかったが、不思議と怒りは出てこなかった。むしろ、自分の凶行を止めてくれたことにほんの少し感謝をしていた。

『まぁだからってぶっ刺された痛みは忘れられないわけだが…。』

はじめはのどを探る。そこには刺された後も、縫合痕もなかった。なんともなかった。

「じゃあひとりひとり紹介と、握手ね。」

「え？」

「なに？」

「いや一気に言われても覚えられないから、打ち解けてからでいいと思ったんだが…。」

「ダメ。決まりごとなの。」

「そうかい…。」

「そ。じゃ始めて。」

「じゃああたしから。」

先ほど発言した長いポニーテールの女子が目の前に立っていた。そして手を差し伸べる。

「柊よ。みんなはひーちゃんとか呼ぶから、お好きに。ようこそ、この世界に。」

「あぁ…。」

その次に前に出てきたのはミニスカートの下にスパッツをはいた小柄な女子。いかにも体育が得意そうといった雰囲気だった。

「あたし、風間。よろ〜。」

「あぁよろしく。」

次。長髪をしなやかになびかせ、薄く微笑む、中性的な顔立ちの男子。制服が男子生徒用でなければその性別に確信が持てないほど。

「森といいます。…よろしく。」

「…あぁ。」

次。左目に眼帯をした女子。代わりに右目は真ん丸くらんらんと輝いていた。新しくこの世界にやってきたはじめに興味しんしん、といった顔をしていた。掴んだはじめの腕をぶんぶんと振り回し、満足そうに笑う。

「よろしくね！あたし中野。」

「あぁ。」

次。左右で色の違うボタンをつけた大きなクマのぬいぐるみを抱いた、無表情の女子。何も言わずに、すっとクマの右手を差し出す。

はじめは戸惑いながらそのやわらかな右手を握る。

「よ、よろしく…。」

「その子、関根ちゃんね。めったに喋らないから。」

「…そうか。」

関根はなにも言わずにもとの位置に戻る。

次。細身の体になぜか腰に竹刀を携えている男子。剣道着こそ着てないものの、

その動きからその有段者だと思われた。

「…三浦だ、よろしく。」

「よろしく…。」

語尾に「ござる」をつけて話すんじゃないかと内心思っていたはじめは少しだけ安心した。

次。時代錯誤も甚だしい、暑苦しい長ランにばっちり決まったリーゼント、校内なのに下駄。典型的な硬派不良といった風貌の男。

「石田だ。」

そう短く言って、はじめの手をぐぐっと握る。その遠慮がない握力にほんの少しはじめは顔をしかめる。

「よ、よろしく。」

次。

岡本と呼ばれた、はじめの喉に包丁を突き刺した張本人だった。灰色の瞳をまっすぐにはじめに向けている。ほんの少し敵意を感じ取ったはじめはじっとその目をにらみ返す。

「…。」

「…。」

黙って手を握り合う。ほんの少しの緊張感。

そして手を離す。なにも言わずに岡本は元の位置にもどった。

「さ〜て、全員終わった？というわけで、この子達が仲間だから。」

「あぁ、いろんな人間が集まってるんだな。でも。」

「ん？」

「あんたの紹介がまだなんだが。」

「…あぁそうだったわね。…、じゃあ改めて。私は茜。永井茜。よろしくね。」

「あぁ。よろしくな。」

握手を交わす。

〜〜〜

「で、この集まりの目的ってなんなんだ？」

「あれ？言ってなかったっけ？さっさと成仏しましょうってことなんだけど。」

「それはわかったよ、散々聞いた。…どうやって成仏するんだ？」

「生きてる時の未練が晴れれば、成仏できる。と思うんだけど。」

「…勘かよ。」

「しょうがないじゃない。未練が晴れたらみんなさっさと消えちゃうんだもの。話聞いてる暇ないのよね。」

「ちょっと待て、じゃあこの集まりにはすでに成仏して消えた奴がいるってことか？」

「そうよ。今はあなた…はじめ君を合わせて１０人だけど前はもっと居たし。逆にもっと少なかった時期もある。常に変動中ってことね。」

「じゃあ明日にでもまた誰かが消えて、俺みたいに増える可能性が？」

「そうね。常に変動中だから。」

「そうか…。」

「なに？」

「なんでもない。」

「そ。まぁみんな仲間だから。…さて、今日は何をしましょうか？」

茜の言葉に風間が手を上げる。

「今日はあたしの番だよね。あたしかくれんぼやりたいんだよね！」

「かくれんぼね。みんな、いい？」

皆一様にうなずく。はじめだけがそれについていけずに頭の上にクエスチョンマークを浮かべていた。

「え？なに？」

「あとで説明するわよ。」

「はぁ…。」

〜〜〜

「かくれんぼ、って校舎全部使うのかよ…。」

「なかなかダイナミックでしょ？」

はじめと茜は跳び箱の中に隠れていた。はじめは８段、茜は６段目から目を光らせている。

「かくれんぼと成仏、なにが関係あるんだ？」

「…、私たちは毎日授業が終わった後こうやってみんなで遊ぶのよ。案は順番に決めて、ね。今日案を出した風間は生きている時は病弱でめったに学校に行けなかったらしいの。で、休み時間にこうやってクラスメイトと遊ぶってことにとても強い憧れを抱いているそうよ。」

「へぇ…、なんか率先してドッチボールしてそうな感じだけどな。」

「そうありたい、と思ってるんでしょうね。なにしろ生きてる時の未練を晴らすためだから。」

「そうか…、そうやって未練を晴らしていこうってことか…。ッ！きたか！？」

「しっ、静かに！」

ぼそぼそと喋る二人の見つめる先、体育倉庫の重い鉄製の扉がぎいいと軋んだ音を立てながら横に開いていく。放課後の校舎を照らすオレンジ色の夕日が小柄な風間のシルエットを映し出す。

「にひひ、ここにいるのはわかってるんだよーん。声、聞こえたもんね。」

「…。」

きゅ、きゅ、とゴム底を鳴らしながら一歩一歩跳び箱に近づいてくる風間。はじめは息を止めて気配を消すことに努めた。

「どっこかなー。ここかな？」

海苔巻きのように丸められた器械体操用の長いマットレスをその細い足でげしげしと足蹴にする。もふもふと細かい埃が蛍光灯の光に舞う。

「…、っくしゅ！」

「ん！…茜みーっけ！」

「あー！お前なにしてんだよ！くしゃみなんかしたら一発でバレんだろ！」

「しょ、しょうがないでしょ！くすぐったかったんだからぁ！」

「にっひひひ。それにしても2人で同じ跳び箱に隠れるなんてなーんかやらしーねぇ。にひひひ。」

「ちょ、風間ぁ！そういうこと言わないの！」

「にひひひひひ〜〜〜〜。」

なぜか鬼の風間が茜に追いかけられる形になり、はじめはやれやれといった感じにため息をつく。

〜〜〜

「で、何人見つかったの？」

完全下校を促すチャイムが鳴り、すなわちかくれんぼの終了を告げる。どこからともなくもとの教室に全員が戻ってくる。鬼である風間はしゅん、と肩を落として茜の問いに答える。

「9人中、3人。」

「ダメダメじゃない。」

「私とはじめ君と、誰？」

「ひーちゃん。机の影からポニーテールが見えてて。」

柊は見つかった原因になったその長いポニーテールをシニヨンのように纏めていた。教室の窓から、遠くに落ちる夕日を眺めるその姿は哀愁に満ちており、見つかったのがそれなりに悔しいようだった。そんな彼女を放っておいて、茜は風間に聞く。

「で、満足できた？成仏出来そう？」

「無理だよぉ！全員見つけなきゃ嫌！」

腕をぶんぶんと振り回し、否定する。こちらもこちらで悔しさをめいっぱい表現していた。

「じゃあ今回はそういうことで。さて、みんなご苦労様。また明日ね。」

誰からともなく教室を去って、降りてきた夜の帳に自己主張するように煌々と光をこぼしている寮に帰っていく。はじめも茜に一言別れを告げて、帰宅の途につく。どっと襲ってきた疲れに眠気を覚え

た彼は、夕飯も食べずにベッドに倒れこみそのまま寝てしまった。

〜〜〜

## ～Red Hot～

「で、今日はなにやるんだ？」

はじめは夕飯を抜いてしまったので、今回もカツ丼とラーメンを盆に載せている。隣で茜がその食欲に呆れながら肩をすくめていた。

「えーと、たしか今日は森君の番ね。覚えてる？あの髪の長い男子。」

「あぁ、あの色男か。」

「そ。今日の遊びは森君が決めるの。…彼のことだからきっとみんなで調理実習でもしたいとか言い出すんじゃないかしら。」

「調理実習？」

「うん。彼のお父さんが料理人だったらしいから。彼は、志半ばで毒死したの。」

「…毒死？」

怪訝な表情をしつつ、卵にとじられたかつを頬張る。

「そ。自分で捌いたフグに当たったとか言ってたわよ。…フグの毒って死ぬんだっけ？」

「…俺に聞かれても。」

「まぁそういうわけ。ところではじめ君って料理できる？」

「…たぶん出来ない。」

「…じゃあ私と森君と一緒にやりましょう。他の皆は結構出来るから。」

「ありがとう。」

「いいのよ、仲間だもの。」

〜〜〜

放課後。昨日とほぼ同じ時間に１０人が教室に集まった。そして森が挙手して発言する。

「今日は僕の番だったね。…いつものとおり、みんなで調理実習がしたいんだ。」

反対するものは居なく、今日はなに作る？とか、たまには食堂以外のものも食べたいからねぇ…といいあっていた。

〜〜〜

場所は移り、家庭科調理室。

皆、制服の上からエプロンを羽織り、頭には三角巾を被っている。森が黒板前に立ち、今日作る料理の説明をしていた。ちなみに彼の長い髪は後頭部で器用に結わかれきれいなポニーテールになっていた。シルエットが柊と被る。

「というわけで、今日は麻婆豆腐を作ります。…なにか質問は？」
はじめと同い年の男子とは思えないほどの柔らな言葉遣いで、説明を終える森。茜が挙手する。
「…森君…。なんで麻婆豆腐なの？」
「だめでしたか？」
「いや、全然。でもあなたはもともと板前を目指してたんじゃなかったけ
？」
「まぁそうなんですけどね、普通の料理も出来ますよ。茜さんがそういうなら次はそういう感じにします？」
「あ…、あなたの番なんだからそこは自由にしてもらってかまわないわ。」
「そうですか。というわけで今回は麻婆豆腐です。辛さは控えめですから、女子にも安心ですよ。特に中野さん？」
名前を呼ばれて、中野が立ち上がる。眼帯をしていない左目が丸くなる。
「な！あたし辛いもの苦手なんて言ったことないよ！」
「そうですね。言ったことは無い、ですね。でも僕はキミがおでんにからしをつけているところを見たことがありませんし、肉うどん

に七味唐辛子をかけたことも無いはずです。」

「な、なんてとこ見てんのよぉぉぉぉ！」

中野はぷるぷると拳を振るわせる。その様子を見て、森は細い目をさらに細くさせた。

「ほぅ、あいつはストーカーの気がありやがったのか。」

「普段から何考えてるかわかんないだけあるね、にひひっ。」

長ランに可愛らしい花柄のエプロンをして、ただしリーゼントが崩れるからと三角巾だけは拒否した石田と、そして彼とペアを組まされている風間が笑う。大柄な石田と小柄な風間が並ぶと、その身長差がより顕著に現れる。

「それでは、作りましょうか。まずは豆腐の水を切るところから。」

〜〜〜

「うぅ…まだ口が辛い…。」

口元を真っ赤に腫れ上がらせているはじめに、茜は少し呆れながら氷を差し出す。

「ほら、冷やしなさいよ。唇がミミズ腫れみたいになってる。」

「サンキュ、まさか関根の作った麻婆豆腐があんなに辛いなんて…。」

「関根ちゃんはかなり偏食だから。この前なんてカレーに納豆かけておいしそうに食べてたし。」

「あー…マジでか。」

「大体、色がおかしかったじゃない。真っ赤だったわよ？」

「いけると思ったんだよ。…だけどダメだった…。負けた…。」

「…勝ち負けの問題じゃ無いと思うけど。ちなみにあの麻婆豆腐、学食のメニューに追加したいって言ってたわよ。」

「誰が食うんだ…。」

「そりゃ関根ちゃんが。」

「オリジナルメニューかよ。俺は絶対頼まない。断じて。」

「そうしたほうがいいわね。…ちなみに明日は中野だから。」

「了解した。」

「じゃ、私こっちだから。また明日。」

「あぁ。」

茜は女子寮に消えていく。

〜〜〜

## ～Ｊｕｍｐ～

翌日。

茜たちと集まるのは放課後なので、それまでは普通に授業を受けて過ごす。はじめのクラスには彼しか居ないので特に事件や面白いことは起こらない。この世界に来たときは十分に楽しかったクラスも今は退屈だった。

シナリオ立った教師の授業も、居眠りひとつしないＮＰＣの人間味の無さにも、今日も平和そうに流れる雲の流れも退屈だった。早く放課後にならないかと思いながらペンを器用に指でくるくると回すが、時計はその速度の３０％にも満たない速度でしか進まない。はじめはペンを口にくわえて、「はぁ…。」とため息をつく。

～～～

「さて、今日はえっと…中野ちゃんだっけ？」

「そそそそ！今日は！あったっし～！」

中野が手をずびしと挙げて存在をアピールする。間髪入れずに立ち上がって、黒板前まで駆ける。

「今回はなにやるの？」

「んーと、今日はねぇ…ブランコ靴飛ばし？」

「ブランコなんかあるのか…？」

まだ学校の隅々まで把握していないはじめが聞く。その質問に森が答える。

「えぇ、実はあるんですよ。ちなみに滑り台もあります。」

「…小学校かよ。」

「それを望んだ人がいる、ということです。」

「ふぅん…。」

二人の会話が終わったのを見計らって、茜が言う。

「じゃあ今日はブランコ靴飛ばしってことで。みんな、外へ出ましょう。」

その言葉に誰とも無くぞろぞろと教室を出て行く。茜は全員が出て行ったことを確認して電気を消灯する。教室は朱色の光に包まれ、椅子や机が長い影を伸ばしていた。

〜〜〜

「そぉれぇぇぇぇぇ〜〜〜い！」

スカートが少しきわどくはためいて、靴が絶妙な弧を描いて彼方へと飛んでいく。得意げな顔をしてブランコを降りた中野はケンケン歩きで自分の靴を取りにいく。拾った後で、そこに円を描いた。

「あたしここね〜！みんなも頑張って〜！」

「じゃあ次はあたしが行こうかねぇ。」

柊がポニーテールを揺らしてブランコに乗る。立ち漕ぎであっという間に高度を稼いで、一番スピードが乗るポイントで革靴を蹴飛ばす。

「っやあぁぁぁぁぁぁぁ！」

気合一閃。

慣性の法則に則った動きで靴は弧を描いて鋭く飛んでいく。

中野の頭上を越えて、その後方たっぷり１０ｍは後ろにコトン、と落下した。とっても悔しそうな顔を浮かべる彼女を横目に、柊は同じようにケンケン歩きで靴を取りにいく。ポニーテールがぴこぴこと跳ねる。

「も、もう一回ぃぃぃぃぃぃ！！！！」

だだだ、と猛烈な勢いで戻ってきてブランコに乗ろうとした森を突き飛ばしそれを奪いとる。そしてぎしぎしと一気にそれを高く高く漕いでいく。

「うりゃあぁぁぁぁぁっ！！！」

気合と共に靴を射出する。弾丸のようにつま先とかかとを結ぶ直線を起点にくるくると螺旋しながら靴は飛んでいく。それは柊の頭を超えた。

「よっしゃぁぃ！ひーちゃんに勝ったっ！どーだ参ったか！」

その言葉に柊の瞳がキランと光る。不敵な笑みを浮かべながら再びブランコに乗る。その際、乗ろうとした森が再度下ろされた。

「てやぁぁぁぁぁっっ！」

気合と共に靴を発射する。山なりの弧を描くはずの靴は、まるでレーザービームのような軌道を取り、直線にかっとんでいく。中野の頭上を優々と越え土ぼこりを上げながら着陸した。

ケンケン歩きで中野の横を通り過ぎる。その際口角をわずかに上げたにやりとした怪しい笑顔をわずかにのぞかせる。中野は悔しさにその身を震わせた。

「くーやーしーいぃぃぃぃぃ！！！！！」

叫びながら地団太を踏む。その姿を見て仲間たちが楽しそうにケラケラと笑った。

「あきらめなよ、中野っちー！あんたがひーちゃんに勝てるわけないでしょー！？」

「じゃああんたがやってみなさいよーーー！！！！！」

「ふぅ、わかったわかった。」

風間がブランコに飛び乗る。あっという間に高度を確保して足を振り抜いた。

「しゅっ！」

それは言い例えるならジェット戦闘機。音速を超える時に発生する空気の壁をぶち破りながら靴は飛翔を続ける。遂には学園の外に延々と続く鬱蒼とした森の中へと消えてしまった。

「あちゃ、やりすぎたかな？にひひひひ。」

「あの子はどんだけの馬鹿力なのかねぇ…。」

「……。」

呆れたように前髪を掻き揚げる柊と口をあんぐりと開けて二の句が告げない中野。風間だけが勝ち誇ったようににひひひと八重歯を覗かせて笑っていた。

〜〜〜

ブランコ靴飛ばしは風間の圧勝で誰も勝てそうに無いので、いつの間にか各々好きなように過ごすことになった。

柊は中野に１００m走での決着を申し込まれ、森はやっとこさ乗れたブランコをゆっくり楽しんでいる。

石田は校庭脇の大樹に腰掛けて居眠りを始め、関根はその隣でクマのぬいぐるみを抱いたままうとうとしていた。

三浦は危なくないように校庭の端で竹刀の鍛錬を始め、風間は鉄棒で大車輪をかましていた。

一方、はじめと茜は水飲み場の縁に腰掛けていた。

「なぁ…、なんで中野って眼帯してるんだ？」

「ん？さぁ？」

「え、さぁ？って知らないのかよ。」

「私が何でも知ってるわけないでしょう。」

「でも森の過去はよく知ってたじゃんよ。」

「まぁそれは彼が話してくれたからね。でも中野からは何も聞いてないわ。」

「…そうか。」

「なんか気になるの？もしかしてあの子みたいのがタイプ？」

「まさか。…ただな、この世界って死ねないだろ？傷もものすごい回復するし。…それで目が見えないなんてありうるのかなと思ってさ。」

「ん～言われてみればそうね。でも彼女がそうしたくてそうしてるんだから放っておいたら？」

「そんなもんか？」

「そんなもんよ。仲間だからって全部を根掘り葉掘り聞かなくていいの。それなりに陰惨な過去があるのかもしれないしね。…でも。」

「…でも？」

「この世界から卒業したかったら、その過去に触れなきゃいけない時が来るのよ。それは本人が一番わかってると思うし。だから私たちがなにか口を挟むことはないの。わかった？」

「ＯＫ。」

「ならよし。」

〜〜〜

夜。ベッドに横たわり、はじめは考えていた。

この世界の人間は皆死んでいる。いわばこの世界は死後の世界、あの世だ。

でも自分の鼓動は今もどくりどくりと音を立てて脈動を繰り返す。暑ければ汗をかくし、激しい運動をすれば息も切れるしちゃんとお腹も減る。生きているときとなんら変わらない。

ただ、この世界では屋上から紐無しバンジーをしても、首を包丁で貫かれても、何をしても死ねない。歳を取ることもないらしい。

生前の未練が晴れて、自分の人生に納得がいった時、成仏という名の卒業が待っている。

「自分の人生に納得…か。」

はじめはまだ生前の記憶を取り戻していなかった。茜は記憶の混濁

はよくあること、と言っていたがこの世界を卒業するには自分の生前の記憶、未練が不可欠なことは明らかだ。それが今欠乏している彼にとってこの世界をどう生きればいいかという最大の目的がなかった。

「でも…。」

でも茜や他の仲間と一緒に過ごすことは楽しかったし、それをやめようとは思わなかった。今はまだ生きる理由も、未練の解消法もわからなかったが、彼らと一緒にいようと決めた。

〜〜〜

## ～To Be With You～

「さてさて、今日は関根ちゃんだけど…、なにする？」

「……。」

「図書室に行きたい？」

「え、茜。何いってんのかわかるのかよ。」

「当然でしょ。」

「…さよか。」

「あと石田君もわかるわよ。ね？」

「いきなり俺に話を振るな…、ほら図書室へ行くんだろ？俺は先に行っているからな。」

「行っちゃった。じゃみんなも行きましょう。」

ぞろぞろと教室を後にする。

～～～

大小様々な本が所狭しと並ぶ図書室の中で3人がけの革張りのソファーの真ん中にドンと陣取り、関根は大きな絵本を読んでいた。内容は黒猫が友達のために命をはって頑張った挙句死んでしまうという少し悲しいお話。

他の仲間たちはそれぞれ思い思いに本を選び取り読んでいた。

はじめはさほど分厚くもないファンタジー小説を手にとってぺらぺらとページを進めていた。正直内容は真面目に読んでいない。少し黄ばんだ紙束越しに仲間を見ていた。

柊と中野は「今日のおかず」というレシピ本をこれは美味しそう、これはいいやなどと勝手な評価を下しながら、時々森に今度の調理実習は鮭のチャンチャン焼きを作らないかと持ちかけていた。

窓際のソファーでは風間と石田が隣り合って居眠りをしていて、三浦はなにやら流浪武士が行く先々での事件を解決する小説を熱心に読んでいた。

森は何故か鍛造の仕組みを事細かにかつわかりやすいように説明している本を時々中野と柊と目線を合わせずに会話をしながら読んでいた。

茜は関根の隣で妹の面倒を見る優しいお姉ちゃんのような瞳をしながら一緒に絵本を読んでいた。

岡本の姿はなかった。

一通り眺めた後で、少し眠気を覚えたはじめはその睡魔に身を任せることにした。

〜〜〜

とぷり、とぬるま湯の中に浸かるような感覚。全身が心地よい温も

りに包まれて息苦しさは感じない。無重力のようで上か下かもわからないが不快感は無かった。どこかからくぐもった会話のような声が聞こえる。

「…もうすぐね。」

「あぁ。」

「そういえば、あれ決めてくれた？」

「…まだ。」

「もう。しょうがない人ですね～。」

「…ごめん。」

「いいのよ。この子にあげる初めてのプレゼントなんだから。真剣に考えてほしいもの。」

直後、頭を優しく撫でられるような感覚が走る。体のすべてを預けられるような安心感を伴った愛に満ち溢れた優しさだった。体の奥底の鼓動が一度大きく聞こえた。

彼は暖かな光の中でまたゆっくりと目を閉じる。眠りにゆっくりと吸い込まれるように落ちていった。

～～～

「…っ。」

はじめは目を覚ました。もう世界は夜の帳を下ろし、校内は暗く闇に溶け込んでいる。その中で図書室だけがその闇に捕らわれないように煌々と蛍光灯の光で浮かび上がっていた。

「…やっと起きた？お寝坊さん。」

頭の上から声が降ってくる。そこには自分を覗き込む形で優しく微笑む茜の顔があった。

『…覗き込む？』

はじめは寝起きの頭で一瞬考える。茜の顔の向こうには蛍光灯が、それに照らされる天井が見える。そして後頭部には図書室にはあるわけのないやわらかい枕のような感覚。そして少しだけ鼻をくすぐる金木犀のような甘い清潔感のある香り。

「うおっ！？」

自分が茜の膝枕にお世話になっていることを確信してはじめは慌てて体を起こす

。顔がぶつかりそうになって、茜は寸前でそれをよける。

「ちょ、びっくりするじゃない。いきなり顔上げないでよね。」

「いや、そうじゃなくて、ていうか、え？」

真っ赤な顔をして混乱するはじめ。そんな彼を見て少し呆れたような、少し嬉しそうな顔を浮かべる茜。

「…深呼吸でもして落ち着いたら？」

「…すぅ〜、はあぁ〜。」

「落ち着いた？」

「一応。」

「で、なに？」

「いや、なに？じゃなくて、なんで膝枕なんか…。」

「まぁいくらソファだからって寝づらいかなぁと思って。…だめだった？」

ホンの少しだけ気恥ずかしそうな横顔をする茜を見て、はじめはさらに顔を赤くする。

「い、や…そんなことないです…。なんというか、あ、ありがとう。」

「ど、どういたしまして。」

沈黙が落ちて、微妙な空気が流れる。時計の針が奏でる微かな音が心臓の鼓動よりも大きく聞こえて部屋全体が萎縮してしまったかのような感覚に捕われる。二人の間の少しの距離が遠いようでとても近いようで、距離感が混乱する。

「あっと…、あのさ。」

「な、ななに？」

「そ、そろそろ飯でも行くか？奢るぜ。」

「…そ、そうね、いきましょう！」

言うが早いが茜は立ち上がり、さっさと行ってしまう。いつもより少し歩みが速いのは鼓動に巻かれているのか、気恥ずかしさから逃げ出したい心の現われなのか。はじめは若干小走り気味で茜を追いかけた。

〜〜〜

その後、お互いに無言で暗い校舎を歩き、特に何も起こらずに食堂に着く。ろくに会話も成り立たないまま食事が終了し、お互いの寮へと足を向ける。

「…ありがとう、ごちそうさま。」

「あぁ、また明日。」

「うん。」

「ちなみに明日は誰？」

「…明日は、三浦君ね。…たぶんキツイから覚悟してて。」

「…なにするんだ？」

「それは明日になってからのお楽しみ。…じゃ、おやすみ。」

「…あぁおやすみ。」

茜の背中に向けてそう言った後、はじめは男子寮へと歩き出す。茜はそっと後ろを振り返り、少しづつ遠ざかるはじめの後姿が見えなくなるまでずっと目を離さずにいた。

〜〜〜

## ～The Trooper～

「と、いうわけで今日は三浦君ね。何やるの？…って言わなくてもわかってるけど。」

三浦は何も言わず頷き、音もなく立ち上がる。皆を先導するような形で教室を出た。その後をぞろぞろと歩き、階段を下り、渡り廊下を通り、やがて見えてきたのは柔道部と空手部、そして剣道部が使用している武道館と呼ばれる施設。覆いかぶさるように生える大きなケヤキの木がご神木のようで、その建物の威厳を確固たるものにしていた。

白い壁に艶のない黒の瓦、威風あふれる佇まいを感じさせるその建物に三浦を先頭にぞろぞろと足を踏み入れる。三浦がまるで道場破りのように「たのもぉ～！」と叫びながら引き戸を開けた。

そこには紺の羽織袴を身につけ、冷たい板の間の道場に正座をして瞑想をする８人ほどの男たちがいた。どこからどう見ても剣道部に間違いようがなかった。

「遅いぞ、三浦。」

「急くことはないでござろう？」

その剣道部の中で一際体格がよく、開いた瞳からは鋭い眼光が覗く男、―剣道部の大将だろうか―と三浦が言葉を交わす。お互いを威嚇するわけでもなく罵倒するわけでもない。その会話は礼儀を重んじる武士そのものに見えた。その光景に誰も何も言わないがはじめだけが口をぽかんと開けて瞬きだけを何回か繰り返した。

『…ござるって言った！？こいつござるって言いやがったッ！！？』

驚愕、という言葉がよく似合う表情を隠しもしないはじめに気がついた柊がそっと解説する。

「あぁ、あいつはいつもあぁなんだよ。由緒ある侍の末代の家に生まれたとかでああいったしゃべり方をするのが礼儀だと本気で思ってる。まぁ剣道馬鹿なのとパンはあんまり食べない所と竹刀の素振りの場所をわきまえないのが玉に瑕だけど悪いやつじゃないから安心しな。あ、あとこいつの順番の時はほぼ確実に剣道部との勝負になるから。ほら、これ被って。」

「…まじかよ。」

握手した時に思っていた、「まさかござるとかいわないよな」という想像がどんぴしゃで当たってしまいはじめはちょっと引いていた。そして柊に手ぬぐいを被らされていることに今更気づく。

「って、何被らせてんだっ！？」

「なにって手ぬぐい。ほら、面被る時にそれ無いと痛いけど？」

「…俺も出るのか？試合。」

「当たり前でしょ？男なんだから。」

「…。」

どこか納得のいかない顔をしつつ、はじめはその手ぬぐいを取らな

かった。

三浦に案内され道場の隣の更衣室に入る。汗と畳と埃と漢くさい何かが臭うその場所で、三浦にござるござる言われながらなんとか羽織袴に着替え、垂れ、胴、篭手を着け、面は三浦につけてもらう。篭手を先につけてしまった為、面の紐が縛れないという初心者らしいミスをおかしたからだった。

「いてててっ！！そんなにきつく縛んなくたっていいだろぉ！！」

「なにを言ってるでござるか！防具はきちんと身に着ける事で最大の防御力になるのでござる！」

三浦はぎりぎりと締め付けた面の紐をぎゅぎゅっと結ぶ。きつ過ぎるのか、はじめの顔の皮膚がありえない方向に引っ張られ、左の頬は引き伸ばされて右目が引っ吊りあがっている。失敗した福笑いのようだったが、誰もなにも言わなかった。むしろ笑われたほうが救われる、と思わざるを得なかったはじめはなんとも形容しがたい微妙な表情のまま遠くを眺めた。

そんなことはまったく無視して三浦は手馴れた様子で防具を身につけていく。気合を入れるように篭手をはめると、大きく深呼吸をした。

「さぁ、いくでござるよ。今日こそ雪辱を晴らし勝つでござる。」

## ～Orge Battle～

先鋒、石田豪。

次鋒、天野一。

中堅、風間薫。

副将、岡本信二。

大将、三浦満彦。

大将の三浦を先頭に5人が並ぶ。対峙する屈強な剣道部の面々の顔をざっと眺め、はじめは『これ、勝てんのか…？つかなんで風間が混じってんだ。森はどこ行った森は。』などと思っていた。男子であるはずの森は茜や柊らと共に道場の脇のほうで観戦ムードになっていた。彼ははじめのジトッとした視線に気がつき呑気に手を振るがはじめはそれを思いっきり無視をする。

一同は礼をし合い、一度下がる。

先鋒である石田は面を締め、竹刀を掴みゆらりと立ち上がる。鬼気とした気迫が冷気のように床を伝って道場の空気を変える。はじめは一瞬身震いをした。

「トイレ？」

「違う。」

緊張感の全く無い風間の言葉をツッコミで一蹴して、再度石田を見る。

足運びや落ち着き様や研ぎ澄ましたような気合から見ても、石田が相対する剣道部の先鋒に負けるような要素は１つも見当たらない。

こういった勝者数形式の試合の場合、まず先鋒で勝利を収め士気を上げるという戦略が組まれることがある。今回、三浦が発表した順はまさにその方法で、初心者のはじめを先鋒に置いて勢いを欠くことより、石田がまず１勝を決め、勢い付けることを狙った。つまりはじめはまだ実力がわからないので負けることを前提に組んであるということだが、三浦はそのことをはじめにわざわざ伝えはしない。

「はじめぇぃ！」

紅白の旗を両手に携えた審判が凛と試合の始まりを告げる。その瞬間、石田は獲物を狩る猛獣のような気迫を背負い、相手に襲い掛かる。

板の間を踏みつける低い振動と、一瞬後に響く空気を切り裂いたような高い快音。そして響き渡る石田の「面ッ！」という気合に満ち溢れた声。

それはまさに刹那。

相手は何も出来ないまま、竹刀を中段に構えた試合が始まったときの最初の体勢のまま、石田に討たれた。面の奥に隠れた顔が覗えないので、まるで打ち込みの練習用の人形のように見える。まさに木偶人形だった。

「やられたかもしれないでござるな…。」

試合を見ていた三浦が苦々しくポツリとつぶやく。岡本を挟んで風間が緊張感のない声で聞く。

「なにが？」

「あの先鋒…、ただ捨て駒だったかもしれないでござる。今回は勝ち抜き戦ではなく先鋒は先鋒同士、大将は大将同士で戦う勝者数戦なのでござる故、あんな素人のような動きしか出来ない先鋒に石田殿を当てるのはいやはやなんともしてやられたといった感じでござる…。あれでは石田殿も興醒めかも知れないでござるな…。」

ふうむ、と手を顎に当てる三浦に対して風間はあっけらかんと、

「要するにみんな勝てばいいんでしょ？とりあえず1勝はもらったようなもんだし、あとはそれに続いて勝ちまくれば問題なしでしょ。しかもあたしの相手、たしか前もやった相手だと思うけど、たぶん負けない。安心しなよ、三浦っち。にひひっ。」

そういって八重歯を光らせながら無邪気に笑う。三浦もそれに釣られて軽く微笑む。

「そうでござるな…。かたじけない、風間殿。」

「なんのなんの、にひひっ。」

そうこうしている間に石田はあっという間に2本先取して、勝ちを決めていた。お互いに一礼し、袖に下がる。

「いえ～！石田っち、ナイスファイト！このままはじめっちも勝っちゃいなよ～！にひ！」

「ちょ、風間無理言うな！俺、剣道なんてまじめにやったことないんだから！」

「はいはい、へっぴり腰になってないでさっさといきなさいよ～！」

試合に参加してない茜が道場脇から激を飛ばす。

「茜！別にへっぴり腰なんかになってないっての！」

「わかったわかった。ほら、お相手さん待ってるみたいよ～？早くしたら？」

「…くそう…。」

はじめは覚悟を決めて竹刀を握る。慣れない防具の重さに少しだけふらつきながら、それを茜やみんなに悟られないようにしながら相手の対面に立つ。

一礼の後、審判が一瞬待って試合の始まりを宣告する。はじめはスッと息を吸い込んだ。

はじめは剣道のルールや作法など細かいことは知らないし、竹刀を握ったことがあるかと過去を思い出そうにもまだ記憶が戻ってない。手探りでいきなり試合に組み込まれても正直勝てる気がしないのが事実だったが、悪い気はしなかった。この世界で出来た仲間に信頼されてもらったような、自分だけじゃなくて相手からも仲間だと思われたようなそんな気持ちが心を少しだけ暖かくしてくれた。

はじめは相手の次鋒を睨む。じりじりと詰め寄っては離れ、気を伺うような動きをしている。はじめはそのにじり寄ってくる瞬間の一瞬を狙って、ぶわっと一気に距離を詰める。剣道の基本であるすり足移動ではなく、乱暴に走るように駆け寄ったことで相手の意表を突いたのか、怯んだように見える相手の脳天目掛けて振り上げた竹刀を振りぬく。

シパァン！と道場内に響き渡る鋭い音と、

「どーーーーぅ！！！！」

間延びした声。それはもちろんはじめのものではなく、相手の出したもの。

はじめは面を討とうとして竹刀を振り上げたところを、逆に思いっきり胴を打たれていた。自分の左側を抜けていく相手を認識出来ないまま、はじめは振りぬいた勢いそのままに竹刀を道場の板の間に思いっきり打ちつけた。

硬い竹刀がさらに硬い床にぶつかり、思いっきり弾ける。はじめはその衝撃で手が痺れ、竹刀を離しそうになる。だがどこかで「竹刀を落とすと反則負け」と聞いたことがあるような気がしたので、意地でも落とさなかった。

「一本！」

見事に決まった胴に審判は旗を振る。はじめは自分の後ろ側から「やっぱりだめか」とでもいうようなため息を聞いたような気がした。竹刀をきつく握りなおし、定位置に戻る。仲間の期待に応えようと

奥歯にぐっと力をこめた。

「はじめぇ！」

はじめは無理に距離をつめず、相手が近づけば足を引き、遠ざかれば半歩詰めた。２本先取されれば負けてしまう。それが怖くて逃げているのではなく、相手の出方を伺っているのだが、剣道素人のはじめが窮地で考えたそんな付け焼刃な策が毎日竹刀を振るっている剣道部に通用するはずもなく、剣先すら届かないほど目いっぱい開いていた距離をたったの一瞬で詰め寄られる。

突撃してくる相手に気圧され、思考が押しつぶされたように止まる。防がなければ討たれるとわかっていても腕が上がらない脚が引けない体が動かない。息が逆流したような切迫感と共に、脳天に灼熱の斧を打ち込まれたかのような激痛が走る。

途端、壊れかけの蛍光灯のように視界が明滅を繰り返し、糸の切れた操り人形のようにはじめの体は膝から地面に崩れ落ちた。鼓動と浅い呼吸音だけが呪詛のように脳内を右へ左へこだまする。

遠く揺らぐ意識の反対側で誰かが自分の名を叫んでいるような気がしたが、それに答えられるはずもなく彼の意識は深く沈むように堕ちていった。

## ～Calling Dr. Love～

「う…、…？」

ぱち、と目を開けると白い天井が見えた。間仕切るカーテンのレールが走り、蛍光灯が遠慮がちに光っていた。そこはどうやら保健室。

「あ、やっと起きた。お～い茜～、はじめ君起きたよ～？」

「う…なにこれ…。」

はじめの顔に覆いかぶさるように覗き込んでいた中野が一転、間仕切りのカーテンの隙間から出て行き、そして茜を連れて戻ってきた。

起きたはじめを見るなり、顔や髪や頭をぺたぺたわしゃわしゃと撫で回すように触りまくる。それはどこか負傷が残っていないか、起き上がっても大丈夫なのかと確認しているだけで実際は性的な意味は全くもって無いのだが、思春期真っ只中のはじめには傷の確認というより「女の子にぺたぺた触られている」という事実がとても恥ずかしくて、真剣な茜の手を払いのけるように反射的に動いてしまう。

「ちょ、なによ。人が心配してあげてるのに！」

「あー、そんなぺたぺた触るなっ！いきなりびっくりするだろうがッ！」

「じゃあどうすればいいのよ。」

「なんか言ってくれよ。」

「じゃあ…触るわよ。」

「うぉう!?」

とても端的に言われた後で、頭を抱きしめるように茜の腕が伸びてくる。茜としては後頭部に傷が無いかの確認をするための行動なのだが、されるほうのはじめとしてはただ茜が自分のことを抱きしめてるとしか認識できず、しかも彼女は頭を抱えるような体勢なので、はじめの眼前には茜の胸が触れるか触れないかの位置で彼女の呼吸とともに上下しているのがはっきりとわかり、しかもなぜかブラウスなので目を凝らせば白い布地のその奥に薄ピンクのレースのようなものがうっすら見えるような気がする。だが、それを直視出来ない青春小僧のはじめ。その二人を遠目に見ながら中野が右目をにやにやと怪しく歪ませていた。

「…大丈夫そうね。」

そう言ってやっと離れる茜。はじめが顔を真っ赤にしているのを不思議そうに眺めて、なぜそうなったのか全くわかっていない茜にぽつりと言う。

「ピンクのレースか…随分かわいいのしてるんだな、お前。」

「え?」

目を真ん丸くした後で自分の胸をしばし見つめる。たっぷり十秒は考えた後で、猛烈な勢いではじめの右ほほをビンタした。鞭のような音が響いて、「どしゃ…」とはじめが倒れる音が後に続いた。

「なぁにしやがんだ！！」

「うるさいわね！この変態！人が心配してあげてんのにどこ見てんのよ！」

「別に好きで見たわけじゃないわ！目の前にあったら嫌でも視界に入るだろ！」

「だったら目瞑っとけばいいじゃない！結局見たかっただけでしょ！？認めなさいよ！」

「やだねー絶対やだねー！天地がひっくり返ったって認めねぇからなー！」

「なによ、この意固地！」

「なにぃ！？」

ばちばちと火花が見えそうなほどに睨み合う二人を若干呆れたような顔で見ながら、

「痴話げんかはもういいでござるか？」

三浦が口を開く。その声に二人は「あぁ！？」「なによ！？」と怒りの矛先を変えながら振り返ると、１つ分のベッドだけを間仕切っていたカーテンは完全に開け放たれ、二人のやり取りを生暖かく見守るほかのメンバーがいた。はじめと茜は双方真っ赤な顔をして押し黙る。さっきの勢いは完全に殺されていた。

〜〜〜〜

「それで…なんでこんなことになってるんだ？」

「はじめ殿は覚えてないのでござるか？」

「いや、試合に出たのは覚えてるけど…。」

「負けたことは？」

「…あぁ…俺は負けたのか。…すまない。」

「はじめ殿が謝ることはないでござる。むしろ采配を間違えた拙者のほうが悪いのでござるから。」

「そうだねぇ…実力もわからないはじめ君をいきなり試合に入れたのはあんたのミスだったかもしれないねぇ…。」

柊の言葉に三浦は頷いて、はじめに向かって深々と頭を下げる。

「はじめ殿、この度の拙者の失態。許してほしいとは言わないでござる。むしろはじめ殿が望むなら、この腹を掻っ捌いて進ぜようッ！」

どこに持っていたのか、手のひらに収まるほどの小さなナイフを腹に向けて構える三浦。いくらここが死なない世界だといえど、目の前で腹切りをされるのはたまったものではないと必死に止める。

はじめと茜と中野の3人がかりで止めてナイフを奪い取る。その際、はじめの手が少し切れたが、はじめはそれを放っておいても治ると

いうことで無視した。

「…それで？試合の方はどうなったんだ？」

「中止に決まってるじゃない。」

さも当然のように茜が答えて、その意味を三浦が答える。

「剣道は読んで字のごとく剣の道。試合をする以上勝敗も大事でござるが、それ以上に礼儀を重んじるのでござる。相手側がはじめ殿を怪我させてしまった自分たちに剣を握る資格はない、と言って試合を辞退してしまったのでござる。なので今回は中止という流れに相成ったということでござる。」

「そうか…なんか足手まといになっちまったな、俺。」

「そんなことはないでござる！それもこれも拙者の未熟ゆえに…やはりここは死んで詫びを！」

「うおおぉやめろおおお！」

再び切腹の構えを見せると同時に押さえ込まれる三浦。中野が機転を利かせて、後ろで手首を縛る。なぜか蓑虫のように床に転がされた三浦が少し可哀想な気がしてきたが、またすぐ切腹をぉぉとか騒がれるのも困るので放っておく。

「…要するに、お前が負けたのが悪いんだ。少しは反省しろ。」

「あぁ…それはわかってる。俺がしっかり出来てれば…ってお前石田か！石田なのか！？リーゼントはどうした！？」

時代錯誤の長ランを着るその姿にいつものリーゼントは無し。その代わりどストレートのロン毛だった。その姿を見て驚いてるのははじめだけで、ほかの仲間はそれほど気にしていない様子だった。まるで珍獣を見るかのような眼差しではじめは石田を見る。

「…なんだその目は。…面を被る時にさすがにあのままじゃ無理だろうが。だからわざわざ整髪剤落としたんだよなんか文句あっか。」

「…そ、そうなのか。」

意外とストレートも似合ってる、と言おうと思ったが、本人としてはリーゼントではないことにストレスを感じているのか少々不穏な態度だったのでこれ以上は追求しないことにした。

「というわけで、もう日も暮れてるしみんなでご飯食べに行きましょ？はじめ君ももう起きれるでしょ？」

茜がそう言ってぐるりと見渡す。全員頷いて、最後にはじめを見る。はじめは自分が倒れてから今までずっとみんなが待っていてくれたことに感動しつつ、しっかりと頷いた。

「あぁ、そうしよう。」

〜〜〜

ぞろぞろと廊下を歩く音が遠くなって、やがて聞こえなくなる。

「拙者はいつまでこうしてればいいのでござるかぁぁぁ〜〜！！！」

真っ暗い校舎にそんな叫びが響き渡った。

## ～All Night Long～

みんなで談笑をしながら食事をし「また明日」と別れを告げ、部屋に戻ってきた。

ガチャ、とノブを回す。自分の部屋なので特に遠慮はない。

だがドアは開かず、はじめを拒絶するように静かに佇んでいた。はじめは首を傾げながら、鍵を開けた。

室内は暗かった。開けっ放しのカーテンからわずかに取り込まれる光が部屋の中のシルエットをほんの少しだけ浮かび上がらせる。いつもと変わらない質素な部屋のはずだった。

えっ、と一瞬だけ思考が止まる。今までこんなイレギュラーなことはなかった。はじめが帰ってくる時には同室の森本が絶対に居るはずだった。それ故、はじめは鍵を掛けることはあっても開けることはなかった。ただの一度もなかったはずだった。

「…風呂か？」

そういいつつ電気のスイッチをパチンと押す。コンマ何秒か遅れて蛍光灯が無機質な光を放ち、室内を照らし出す。そこには。

森本の使っていたものがすべて無くなっていた。

彼の机や二段ベッドの下側など、この部屋に備えついているものはもちろん残っているが、森本が使っていた教科書や鞄、制服や私物の類が一切姿を消していた。まるで最初からこの部屋にははじめし

か居なかったかのように。

ぞっとした。まさか空き巣？泥棒？それとも何も言わないで部屋を換えたのか？

いろいろな可能性を頭の中で浮かべてみるが、どれも違うように思えた。そんな生半可なものでなく、「この世界から森本という存在が根こそぎ消え去った」ような印象を受けたからだった。

はじめは得もいえぬ恐怖をじりじりと感じながら、布団に包まった。

いつもならすべて消すところを、小さい電球の明かりだけ点して。

ドアには鍵はかけずに。

〜〜〜

学習棟渡り廊下。

「あぁ…じゃあもしかしたらその森本って人、人間だったのかもね。」

休み時間、たまたま自動販売機前で鉢合わせた茜に、昨晩のことを話した。返事はわりとあっさりしていた。

「…どういうことだ？」

「ん〜、この世界にやってきた人間が成仏できて、この天上学園から卒業する時は一瞬で跡形も無く消えちゃうのよ。ほんとに、名残惜しさも感じさせないような一瞬で。」

「…。」

「で、部屋はまた誰かが使うでしょ？だから片付けられちゃったんじゃないかと思うんだけど…。…なに泣きそうな顔になってるのよ。」

「ッ！なってねえよ！…でもさ、こっちに来た時に一応いろいろ世話になったからさ。さよならくらいは言ってやりたかったかなと思ってよ…。」

しゅん、と下を向くはじめに茜は優しく微笑む。

「いいのよ、言えなくたって。きっと伝わるわよ。はじめ君の思いは。」

「…そうかぁ？」

「そうじゃなきゃつまんないでしょ。…ほら、いつまでもしけた顔してないで次の授業の準備しなさーい。わたしは移動教室だから。」

「…そうか。って茜って何組なんだ？」

「え？…ん～、内緒。じゃね、またあとで。」

言うが早いがさっさと行ってしまった。

はじめは一人ポツンとその場に残される。少し考えた後で、おとなしく教室に戻ることにした。

## ～End Of Days～

学習棟A棟空き教室。

「というわけで、今日は石田君なわけだけど…、どうする。」

「寝る。」

たった一言だけ返ってきた。その潔いのか面倒なのかわからない返答の仕方に若干呆れつつ、茜はぱんぱんと手を叩く。

「はい、じゃあいつもどおり寝るってことで。…場所は？」

「…屋上。」

「はい、じゃあみんな移動開始～。」

茜の声を合図にぞろぞろと教室を出て行く。はじめはまだよくわからない様子でみんなの後についていく。

～～～

学習棟A棟屋上。

はじめはここに来るのは初めてではなかった。この世界に来た当初、学校内を彷徨ってる間にいつの間にか屋上に来たことがある。見渡す限りの森の中、小島のようにポツリとこの天上学園があるだけの、現実感がない世界。

着くやいなや今日の発案者である石田は、今は動きを止めているエアコンの大きな室外機に背中を預けるようにどかっと座るとすぐに寝息を立てだした。

「…早ぇ…。」

そう言うはじめの前をいつも大きな（そしてちょっと奇妙な）熊のぬいぐるみを抱きかかえている無口少女関根がとっとことっとこと通り過ぎ、もぞもぞと石田の肩にそっと寄りかかり、すぅすぅとすぐに寝息を立てだす。

はじめがなんとも形容しがたい表情でそんな二人を眺めていると、

「気になるかい？」

柊がぬっと背後から姿を現す。遮蔽物が無いがゆえに地上よりほんの少し強めに感じる屋上の風に、長いポニーテールがゆらゆらと揺れていた。

「ん…、あぁ。案外仲良いんだなと思ってさ。」

「そうだねぇ。お互い信頼してるみたいな感じさね。」

「信頼？」

「あぁ。…少し話をしようかねぇ。」

柊は一度ちらりと茜の様子を見て、中野と風間と一緒に眼下の校庭を眺めながら

、なにやら談笑をしていることを確認した上で、はじめの手を取り、

屋上から離れた。

観音開きになっている出入り扉をそっと開き、半階分階段を下る。踊り場で適当に腰掛けながら、柊はゆっくりと口を開く。

「…あいつにはね、生前、歳の離れた妹が居たんだ。たしか十は歳が離れていたとか聞いた。でね、あいつは母子家庭だったらしくて、豪が親の代わりをしてたところも大きかったらしいんだよ。母親が夜遅くまで働いて、豪はそれをサポートするように妹の面倒を見てた。…見た目があんなだから色々学校では問題児扱いされてたみたいなんだけど、外面も古風なら中身も負けず劣らずでね。自分はいくらでも汚れ役を引き受ける代わりに、その妹にはその陰りを味わってほしくないとか、奴は奴なりの揺ぎ無い大儀があったらしいんだよ。…でもそれがある日突然壊れちまうのさ…。」

柊は一度ため息のように息を大きく吐き出すと再び大きく吸い込む。覚悟を決めるような一瞬の間だった。

「…あいつの親父はずぼらでアル中で、あいつ曰く最低最悪なクソ野朗とか言ってたけど…。その親父に大事な妹を連れて行かれちまったんだ。理由はよくわからないらしいけど…。で、あいつは自分の舎弟衆を引き連れて、親父のアパートへ向かう。連れ戻した妹は舎弟たちに預けて、自分は親父と血まみれになって殺りあった。…そしてあいつは実の父親を自分の手で殴り殺してしまう。」

はじめはあっさりと告げた柊の言葉に一瞬息を詰まらせる。柊はそれを横目で確認した上で、さらに続ける。

「もちろんあいつは罪に問われ、少年院入り。決して短くない期間、そこで過ごし更正の教育を受けることになるわけさ。そこでも豪は

決して自分のやったことに間違いはなかったと、自分が手を血で染めることで大事な妹を最低最悪なクソ親父の魔手から永遠に逃れさせることができたとそう思ってた。本気でそう思ってた。だけど、そうはいかなかったのさ。何年かぶりに自分の家に帰って…、成長した妹と再会を果たす。月並みなドラマじゃそこで硬く抱擁でもし合ってエンディングなんだろうが、現実はそうはいかなかった。奴が自分の手を血に染めてまで守り抜いた大事な妹は、豪の顔を見るなり…発狂した。…妹の記憶には自分の父親をその拳で殴り殺した男、という風になっていたらしくて、そんな男が自分の目の前に現れたんだ。…次は自分が殺されると想像しちまったからなのか、父親が殺される場面がフラッシュバックしたからなのかはわからない。…だけど、守って守って守り抜いた大事な妹とは二度と顔を合わせられないまま…だったそうだよ。…だから…あいつが関根や風間なんかとよくつるんでるのは、あの子たちの笑顔に、自分の守りたかった妹の笑顔を重ねてるからなのかも知れないね。…その事をあの二人は知らないはずだけど、特に関根なんかは豪のこと気に入ってるみたいで今みたいに良く隣り合って寝てることが多いさね。」

はじめには、二の句が告げなかった。ただ、重く苦しい息が口からこぼれていくのをわずかに感じることくらいしかできなかった。その様子を見た柊が、ぽん、とはじめの肩を叩く。

「なぁに、あんたが落ちこむことはなんにも無いさね。…ここにいる連中っていうのはそういう人間ばっかりさ。むしろこういう人生じゃなきゃこんな世界に来る必要だってなかったんだから…。…それと、この話を聞いたことは他言無用だよ。特に豪自身には。もしばれたら、木刀で滅多打ちになるかも知れないから注意が必要かもしれないね。…覚えてるだろ？あの見事な太刀筋を、さ。」

はっ、とはじめは背筋を凍らせる。あの鬼神のような面を食らった

ら…と考えるだけで、脳天に痛みが走る気がした。そのあからさまな怯え様を見て、柊は笑いを漏らす。

「ま、そんな感じさ。…ほかに聞きたいことは？」

はじめは数秒考え、言う。

「…ん、…なんでそんなことを知ってるんだ？…あいつがそんな自分の過去を赤裸々に語るような男にはちょっと見えないんだが。」

「…あいつもあたしもこの世界は長いからね…。毎日のように顔合わせてりゃ、こういう話をぽろっとしたくなっちまう心境の日だってあったはずさね。」

少し遠い目をして、天井を仰ぐ柊。その背中に、やはり人並みならぬ過去が背負われているような気がするのは気のせいじゃないだろうな、とはじめは思う。

「…もうひとつ聞いていいか？」

「あたしが答えられるものならね。なにさ。」

聞いておきながら、はじめは少しだけ躊躇う。天井を仰いだままだった柊は訝しげに、はじめの顔を覗く。

「…なにさ？聞きにくい事かい？…あ、ちなみに茜のスリーサイズなんてのは些かあたしだって知らないからね。」

「ッ！そ、そんなことじゃない！」

一瞬で頬を赤く染めるはじめ。

「…あ、そうなのかい。じゃあなに？」

「…、その、前世の記憶っていつ戻るんだ…と思ってさ。」

「…、それは人ぞれぞれさね。ちなみに前世じゃなくて生前、だけど。」

「人それぞれ、か…。」

「…あんたはまだ、記憶が戻ってないんだったね。…きっかけもわからないのかい？」

「…全然だ。茜は交通事故とかで亡くなった場合、記憶が飛ぶのは稀じゃないとか言ってたけど。」

「じゃあ交通事故なんじゃないのかい？」

「いや、それすらも覚えてないからなんとも…。」

それじゃ埒が明かない、といった表情で柊は肩をすくめる。

「まぁ…焦らずにゆっくり思い出せばいいさ。ここでの時間は無限だから。」

「…そうするかな。」

「…じゃ、そろそろ上に戻るとするかね。あまり勝手な行動してると茜に怒られちまうからね。」

夕闇に照らされ橙に光る階段を登り、再び屋上へ上がる。先ほどより幾分か温度が下がってしまったのか、吹く風はどこか湿り気を帯びていて、冷たかった。

完全に寝入っていた石田と関根を起こし、闇に侵食されつつある校舎をぞろぞろと歩いていく。一番最後を歩くはじめは前を歩く仲間たちの背中を見て、人知れずため息を吐く。

みんな、陰惨な過去を背負ってるのだろう。人に話すのもはばかれるような生前の記憶を。それを乗り越えて、自分の人生に納得をつけるために、ここで過ごして、いつか消えていく。

いつか自分も消える日が来るのだろうか？

答えはまだ、見つからない。

## ～Bad Medicine～

～～～

学生寮。

翌朝。

はじめはごそりと2段ベッドの上から降りてくる。もう森本とは逢えない気がしていたが、それでもベッドの下を使う気にはなれなかった。

歯磨きや洗顔をし、制服を着て、部屋を出る。今までどおりに鍵を閉めた。

～～～

大食堂渡り廊下。

「あ、おはよ。」

「あぁおはよう。」

待ち合わせもしていないのに、偶然茜と大食堂の入り口で鉢合わせる形となり、自然と一緒に中に入っていく。

「…なに？なにか元気ない？」

気だるそうなはじめの様子が気にかかったのか、茜は心配そうに顔を覗き込む。はじめは首を振ってそれを否定する。

「ん…、まだ少し眠い。昨日寝るの遅かったからさ…。ふあ…。」

「そう、なにしてたか知らないけど、授業中寝ないようにね。先生もＮＰＣの一人とはいえ、居眠りしてたら怒られるわよ。」

「…そうか、…気をつける…、ふっ…あぁあ～。」

大口を開けて、あくびをかみ殺すはじめの様子に、どうしようもないわね、とあきれ顔を浮かべる茜。いたずらに食券機のタッチパネルを指差し、

「…全然だめじゃない。朝ごはんこれにしたら？」

そこには麻婆豆腐の文字が。はじめはびくり、と体を強張らせながら

「ッ！そ、それは！」

「関根ちゃん考案の激辛麻婆豆腐が早速ラインナップしたみたいね。…頼む？目、覚めると思うわよ？」

「やっ、やめろって！」

冗談でタッチパネルを押すフリをした茜の指を静止しようと慌てて、しかもかなり必死な形相で手を伸ばすはじめ。その様子に茜は笑いながら「冗談だってば～」とパネルから指を離すが時既に遅し。コンマ何秒か遅れたはじめの手が、かなりの勢いで画面にぶつかり、食券機のタッチパネルが「ピッ」と音を立てる。

「え？」

「あ？」

一瞬何が起こったのか理解していない２人を尻目に、シュッっという無機質な音と共に、食券が１枚吐き出される。そこには「麻婆豆腐　￥３００」の文字が。

２人はお互いを見合い、にへら、と無意味に微笑みあう。

その後、口の周りを真っ赤にしながら、しかも若干涙目になりながら麻婆豆腐を平らげた。

はじめが。

〜〜〜

「れ？ひょおはおひゃもとろばんらっらっえ？」

本人としては『で？今日は岡本の番だったっけ？』と言っているつもりだが、口が真っ赤に腫れてひりひりしている為、まともに動かせない。茜は眉根を寄せながら聞き分け、答える。

「うん、今日は岡本君。なんで？」

「んや、あんらりはあひたころあいからさ。」

『いや、あんまり話したことないからさ。」と言ってるつもりらしい。

「まぁねぇ…。というか、はじめ君。ちゃんと喋れるでしょ。いつまで辛いフリしてるのよ。」

「なんだばれてたか。」

悪気がない感じで肩をすくめるはじめに茜は呆れる。

「まったく…。あからさまに発音しにくいです、みたいな言葉遣いしてればすぐわかるわよ。で、岡本君がなんだっけ？」

「いや、俺が暴れた時にブッ刺して止めてくれたのはあいつだろ？なんか言いたくてもなかなか近づけなくてな…。」

「…なに、はじめ君。岡本君に感謝してるような口ぶりだけど。」

「あぁまぁ多少は。もうちょっとやり方あるだろと思ったけど、実際あそこで止めてもらえてよかったかな、と。」

「ふぅん。てっきり、全然話そうとしないから嫌ってるのかと思ってた。」

「ん、そういうわけじゃない。…まぁ相手がどう思ってるか知らないが。」

「大丈夫よ、悪い子じゃないから。むしろ面白い、かな。」

「…面白いぃ？」

かなり訝しげに茜を見るはじめ。その顔を見て、茜はクスクスと笑う。

「うん、たぶん想像してるよりは面白いと思うわよ。さて、今日はなにやるのかな～。じゃ、あたし日直だから先行くわ。」

「おう。」

茜の背中を視線で追って、その後高い天井を仰ぐ。空気を循環させるための大きなファンがくるくると回っていた。

「面白い、ねぇ…。ま、放課後になればわかるか。」

コップの水を飲み干して、席を立つ。まだがやがやと騒ぐ大食堂から抜けた。

## ～Speed Queen～

～～～

学習棟A棟3階。

教鞭を振るう教師の言葉をほぼ右から左に受け流しながら、はじめは窓の外に視線を流す。授業がつまらないわけではないが、油断している思考をぽかぽかと暖められるとつい眠たくなるのは仕方のないことだと思う、とか思いながらはじめはまぶたを閉じそうになる。

意識を睡魔に食いつぶされるその瞬間、視界の端っこに風間がスカートをたなびかせながら廊下を猛スピードで駆けていったのを目撃する。ほとんど食われていた意識が一瞬で跳ね起き、睡魔をどこか彼方へと飛ばす。

『焦ってるような顔だったな…なんだ…？』

風間の表情はいつも通り能天気に、にひひと笑っている表情ではなく、必死に見えた。捕まってはいけない何かに追われているような、そんな表情。なにか冷たいものが背筋を駆け抜ける感覚に襲われたはじめは、がばっと席から立ち上がる。

呆気にとられる教師とクラスメイトに「先生、トイレ！」と鋭く言い放つと、廊下に飛び出しそのまま駆け出した。

『追いつけるか…！？』

飛ぶように駆け下りる風間の足音を追いかけて階段を2段抜かしで駆け下り、1階の渡り廊下へと身を滑らせる。だがすでに風間は校

舎の間の中庭を駆け抜けていて、すでに教員棟の裏手の遊歩道を走っていた。そのスピードにはじめが呆れているその間にも、ぐんぐんと距離が離れていく。

『速ぇ…ターボかなんか付いてるのか？あいつの足には…。とりあえず、追いかけるか…。』

先ほど風間が走り抜けていった中庭を駆けていく。だが到底追いつけないと思われるので、途中で歩きに切り替えてのんびりと第一連絡橋を歩いていく。ざあぁと雄大に流れる川の音と、カワセミの高い鳴き声がはじめの耳を撫でていった。

『先生とかに追われてるのかと思ったけど、誰も追ってこないし、そもそもあんな速度じゃ追いつけないよな…。…お、大食堂に突っ込んでったぞ。』

はじめはのんびりと大食堂へと歩を進めた。

〜〜〜

大食堂。

「で、お前はなにをしてんの？」

「ん？」

窓際の席に陣取り、にっこにこ笑顔で肉うどんをすする風間にとりあえずそう聞いて、対面の席に座る。

「なにって…肉うどん食べてるんだよ？うん、美味しい〜。」

「…そんなことは解ってるよ。…もしかして昼飯食い損ねたのか？」

「ううん。ちゃんと食べた。えっと…購買で焼きそばパンとコロッケパンとサンドイッチとワッフルとパックの牛乳。」

「十分すぎるほど食ってるじゃん。」

「うん。でもやっぱり炭水化物取らないとお腹減っちゃって。」

「パンも立派な炭水化物だからな…？」

「ありゃ、そうだっけ。はじめっちもどうせ来たんだからなんか食べてけば？あ、そうだ。食券余ってるけど、よかったら食べる？」

風間はポケットから食券を取り出すと、ひらひらと振って見せる。そこには「ライス（大）　￥１５０」の文字が。

「何が悲しくて、ライス大盛だけを食わなきゃならんのだ。」

「じゃ、あーげないっ。…でもじゃあ何しにきたの？」

小首を傾げる風間。仕草的には可愛いが、口の周りがうどんのつゆだらけなので台無しだ。とか思いながら、はじめはティッシュを渡す。

「…何でもねぇよ。…授業が暇だったから、かなー。」

「ふぅん。じゃあサボりだね。やーい、ふりょー。サボり魔ー。…まぁ休み時間とか授業中の食事は校則違反なんだけどね。」

「じゃあ風間のほうがよっぽど不良じゃん。」

「まぁね。いいのいいの。今回ははじめっちも共犯者だから。」

「…物騒な物言い禁止。」

「にははっ。」

いつのまにか肉うどんを胃に収めた風間は心底満足そうに「ふはー」とため息をつく。そして割と真剣な顔でポツリと

「今日は森っちじゃないのかぁ…。夕飯まで持つかなぁ…？」

その発言にはじめは目を真ん丸くして驚く。

「え、ちょっと待て。今食い終わったばっかりだろう！？しかも昼からまだ2時間程度しか経ってないし！！」

「にひ、あたし燃費悪いから。食べないとおなか減って倒れちゃうよ。」

「…お前の死因はあれか、お腹減りすぎて死んだのか。」

「んーん。違うよ。」

「…そうか。」

テンポ良く続いていた会話が途切れて、沈黙が落ちる。内心、『地雷、踏んじまったかな…。』とビクビクしているはじめをよそに、風間はぽつりと言う。

「…あたしさ、生まれつき体が不自由だったんだよね。ほんとに歩くこともままならなくて。学校だってまともに行けなかったし。だからここでは思いっきり体動かして、めいっぱい遊んでいっぱいご飯食べるんだーって決めてるの。…そしたらいつのまにかとんでもない大食いになっちゃった。にはは。」

「学生の本業は、勉強なんだがな…。」

「まぁそうだけど。でも楽しんだもの勝ちでしょ？」

「…まぁな。」

「はじめっちはまだ思い出せないんだっけ？自分の生前の記憶。」

「…あぁ。全く。」

「…早く思い出せるといいね。」

「…、あぁ。」

「実は…あたしも最初のころは思い出せなかったんだ。」

「そうなのか？」

「うん。思い出したのは結構最近だよ？思い出した後はもう涙が止まんなくて、ずっと部屋で泣いてた。…でもね、閉じこもって泣きはらしてたら、どこで聞きつけたのかわかんないけど茜がひょっこり現れて、ぎゅって抱きしめてくれたんだよ。そしたら涙なんか止まっちゃった。えへへ。」

「…そっか。」

「きっと辛かったから思い出したくないって心のどこかが思ってるんだと思うけど、しっかり思い出して自分の生前の記憶と向き合って、ここでどう生きるか考えないとダメなんだよ？」

人差し指をついっとはじめに向けながら、風間はそう言った。真っ直ぐな瞳がはじめを貫く。

「…、あぁ。頑張ってみるよ。…この世界に来たってことは誰しも陰惨な前世があったからだろ。…それはつまり、俺も同じだと思うから…。」

〜〜〜

## ～Open Your Heart～

～～～

学習棟A棟空き教室。

「はいー。それでは今日は岡本君なんだけど、…どうする？」

黒板の前に立ち、いつもの通りに今日の遊びを聞く茜。だが今日はその隣に椅子に縛りつけられて俯いてる岡本の姿があった。そんな状況なのにも関わらず誰も不信がらないのか、その岡本には全く触れようとしない。

「…ちょっと待て茜。状況を新参者の俺に説明してくれないか？」

「え、なにが？」

「…その岡本の扱いだよ…。可哀想じゃないか？」

「まあね。でもこうでもしないと…。」

茜はそういって岡本の頭を軽く指先で撫でる。人質と誘拐犯みたいな構図だなとはじめは思った。

「しないと…？」

はじめのそんな思いなど露知らず、茜はさも当たり前のように答える。

「勝手にどっか行っちゃうのよ。この人。」

「……はい？」

「岡本君ねぇ…、実はさっきカミングアウトされたんだけど、はじめ君を刺したことにものすごーく後悔っていうか申し訳なさを感じてるらしいのよ。で、放課後になるなりさっさと帰ろうとしてたから捕まえてふん縛ったというわけ。」

「そんな縛らなくたっていいだろうよ…。」

「あら、縛ったのは私じゃなくて、中野よ。三浦君の時と同じように見事な手さばきでね。」

「…。」

無言で中野を伺うはじめにわかるように、荒縄をひょいひょいと振る中野。眼帯に隠されていない右目が得意げにきらきらと瞬く。

「というわけ。」

「…でどうしろというんだ？」

「さぁ？」

しれっと首をかしげる茜。その態度に「なにも考えない状態で行動するなよ…。」と冷ややかにツッコミつつ、この状況をどうしようかと思考を巡らす。

「…とりあえず、解いたら？」

「いいの？どっか行っちゃうわよ？もう解いた瞬間にぴゅ～っと走り去るわよ？」

「いい。追いかけるから。」

「…そう。じゃ中野、お願い。」

「う～いっ。」

刃渡り３０ｃｍはあるでかいハサミで縛っていた荒縄を一気にぶった切る。ぱさり、とその束が地面に落ちても岡本は一切合財動こうとしない。

「…あれ、動かないわね。」

「というより、生命活動が止まっているように見えるでござる。死んでるのではないのでござるか？」

物騒な三浦の発言に、茜は慌てて岡本の首筋に指を当てる。

「…ど、どうなんだよ？」

聞くはじめの言葉を手のひらで静止し、指先に意識を集中する。

数十秒が過ぎ、茜は指を離す。

そして一言。

「うん、生きてるわ。よかったよかった。」

緊張に包まれた面々が一気に脱力する。

「じゃあ何なんだ？」

「寝てるんでしょ。ほら、岡本く～ん起きなさ～い。」

椅子から転げ落とすことを目的にしているような豪快な茜の揺らし方に、岡本はぱち、と目を開く。

「…ん、あ？」

「…チッ、やっと起きやがったな。」

「そうみたいだねぇ。」

石田と柊が呆れたように言う。

うなだれた状態から顔を起こし、深く息を吸い込む岡本。2、3回大きく瞬いて、目の前にはじめの顔があることをゆっくりと確認してからうんうん、と一人うなずく。

にこやかな笑顔をはじめに向けて、それにはじめが釣られて無意味に微笑むとそれが合図だったかのように、岡本は椅子から勢いよく立ち上がり、廊下へと駆け出す。

「やれ、三浦ぁ！」

「合点でござる！はじめ殿ぉおお！！」

いつ打ち合わせをしておいたのか、はじめの掛け声のともに三浦が懐に忍ばせていたくないを飛ばす。螺旋運動をしながら飛翔するくないは、岡本のわき腹にぐさりと突き刺さり血しぶきを上げさせる。ぐぎょあぁぁぁあああ！と岡本がのたうち回りながら叫ぶがもはや誰も気にしない。

「…はじめ君もこの世界でのやりかたがわかってきたようね…。」

なぜか満足そうに茜がうなずく。

そして岡本は再び縛られることとなった。

〜〜〜

「…、結局なんなんだ？」

そうはじめが聞いても、岡本は黙秘権の行使なのか、ずっと黙ったまま。ラチが開かないといった風にはじめが肩をすくめると、茜がしかたないわね、と前置きして話し始める。

「…岡本くん、あなたになにか言いたいことがあるみたいよ？」

「…なんて？」

「直接本人から聞いたほうが話が早いと思うけど？」

「……。」

はじめはじっと岡本を見る。圧力でなく、興味でなく、ただただまっすぐ見続けた。所在無さげに泳いでいた灰色の瞳は、その視線を

受けやがて意を決したようにはじめをまっすぐ見据える。２つの視線が交錯する。

ふっ、と息を吸う音がした。

「…悪かった。」

岡本が体を縛られたままで、なんとか頭だけを下げる。はじめはえっ、と一瞬だけ驚く。

「助けを求めて暴れてたあんたを、暴力で鎮めてしまって、本当に悪かったと思ってる。いくら死なない世界でも痛みはある。それなのに、ああいった止め方しかできなかった俺を、俺たちを許してほしい。…許しが貰えるなら、１発くらい殴ってもらっても俺は構わない…。」

はじめは真面目に岡本の発言を聞いていたが、その後ろでそれ以外のメンバーは驚愕に染まっていた。普段はほぼ無表情な関根ですら、大きく目を見開いて驚いていた。誰に言うわけでもなく風間がぼそっとつぶやく。

「岡っちが、真面目だ…、なんか気持ち悪い…。」

シリアスな面持ちだったはじめは、その声にふと振り返って、

「え、なに？…気持ち悪い？」

聞いた。風間はしっかりと頷きながら、

「うん。いつもはちゃらんぽらんなのに急にそんな真面目モードに

入られると、ちょっとさぶイボ出ちゃうよ。」

「だね。」

中野もすかさず同意して、関根もこくこくと小さな頭を鋭く縦に振る。

見回すとほかの皆も、「いきなり何を言い出すんだ、岡本の野郎は…」みたいな表情をしている。はじめはゆっくり岡本に視線を戻すと、

「…あぁ言ってるけど…どうなんだ？」

渦中の岡本に聞いた。彼はどんよりなオーラを放ちながら

「…狼少年になったような気分です…。」

うなだれて、落胆しまくっていた。

はじめは可哀想な状態に陥った岡本を縛り上げている縄を解き、椅子から立たせる。

「お前の言いたいことはよぉ～く伝わった。…許す、なんてとんでもない。俺はお前に感謝すらしてるんだぜ？…ありがとな、お前が止めてくれなきゃ、俺はやばかっただろうから…。」

固く固く握手を交わし、旧友のように抱きしめる。岡本は驚いた後、安心したように柔らかく微笑む。

はじめの岡本に対する蟠りが一気に解消して流れていく。それはも

ちろん岡本も同じだった。

そんな、「生き別れの兄弟の再会シーン」に立ち会ったかのような雰囲気の教室内に茜が手をはたく音が響く。

「さて、仲直りも出来たところで、もう暗くなって来たしお開きにしましょうか。ご飯食べにいきましょ？」

みんなが頷いて、和やかなムードのまま大食堂へ向かう。

にこにこと先導を切る茜の顔を横から柊が覗き込む。

「…嬉しそうだね、茜。」

「うん、そりゃそうよ、ひーちゃん。これでみんな仲良くなったもの。」

「そうさね。…明日は茜の番だけど、やっぱりアレなのかい？」

上履きから革靴に履き替え、とんとん、とつま先で地面を蹴る茜。その音までもどこか楽しそうだった。

「もっちろん。はじめ君も増えたことだしね。」

「おっけ、了解だよ。」

昇降口の自動ドアがウィンと音を立てて開く。学習棟を出て、みんなで大食堂へ向かった。

〜〜〜

食事が終わって、お茶を飲みながら団欒をする。はじめと対面に座る岡本はすっかり打ち解けて、談笑していた。その様子を見て茜は柔らかく微笑む。まるで弟2人を見守ってるお姉ちゃんのようだった。

〜〜〜

～～～

次の日。

～～～

焼却炉。

教室のごみをまとめて、焼却炉に放り込む。クラスメイトであるＮＰＣはごみの分別がしっかり出来ているようでごみの中にｋｅｙコーヒーの空き缶などが混ざっていることはなかった。はじめは錘を上げて蓋を閉める。と、そこに。

「精が出るでござるな。はじめ殿。」

いつもは竹刀を腰に下げている三浦が、今日は丸腰のままで現れた。

「おぉ、一応真面目に生徒やってるからな。…今日はなんで竹刀がないんだ？折れたのか？」

「まさか。でも、竹刀が使えないというのは同じでござるな。」

なぜかもったいぶるように答えた三浦になんとなくまどろっこしさを感じつつ、

「なんで？」

「竹刀の弦が切れてしまったでござる。だから直そうと思ってきたでござるよ。」

「焼却炉にか？」

「いいや、あっちでござる。」

三浦が指差す先には先日剣道部と一戦交えた末昏倒させられた、はじめにとってはいい思い出のない「武道館」があった。あの時は先導されるがままついていったので詳しい場所は把握してなかった。

「あぁ…ここだったのか。…なんだ新しい竹刀でもかっぱらってくるのか？」

「そんなことはしないでござるよ。竹刀だけに。」

なにやらうまいことを言っているとどや顔を向けてくるがそこは何も言わずにスルーするはじめ。三浦がほんのちょっと寂しそうな顔をするが、それすらスルーして見せた。

「…。ふむ。まぁ竹刀の修理道具は剣道部にしかないので拝借しようかと来たのでござるよ。丁度今なら誰もいないでござるしな。」

「ふーん、誰もいないってわかって来てることはパクる気満々ってことじゃん。」

「固いことは言わないでほしいでござるな。隠密活動も修行のひとつでござる。」

「それは忍びじゃないのか。」

「まぁ似たようなものでござる。…それでは拙者は忍び込んで来るゆえ、戯言もこのあたりで。」

「あっ、ちょっと待て。」

走り去ろうとする三浦を呼び止めて、

「どうせなら俺も行くよ。見張り位にならなるだろ？」

「…はじめ殿…。恩に着るでござる。」

「よしよし、じゃあ行くか。」

〜〜〜

忍び込んで来る、といった割には大胆にがらがらと音を立てながら引き戸をあける三浦。その大胆さにはじめは若干引きつつ後を付いていく。

「この隣には弓道場があるでござるよ。拙者は弓は心得てないゆえ用はないでござるが。」

「へぇ〜。俺もいろいろ校内散策してきたつもりだけど、弓道場なんかあるのか。知らなかった。」

「今度茜殿に案内してもらったらどうでござるか？」

「茜？なんで？」

「仲間の中で茜殿が一番の古株でござるからな。きっと校内の隅の

隅まで把握してるでござるよ。」

「…古株、ねぇ。」

「そうでござる。…それはそうと、今日は茜殿の順番でござったな。…となれば今日はアレということでござるなぁ。」

「アレってなんだよ。」

「放課後になればわかるでござるよ。…あっ、こっちでござる。」

階段脇の扉を開けると、埃っぽい空気が漂ってくる。はじめは袖で口を覆った。

「うわ…きたねぇ。」

「掃除が行き届いてないでござるな。まったく。掃除も修行の内と心得てないでござるか。」

そう文句をいいながら、棚をがさごそと漁る三浦。その後ろ姿はどう考えても泥棒そのものだった。盗みを働くのは修行のうちなのか？と聞きたかったが、埃舞う部屋の中でぎゃあぎゃあと騒ぎたくなかったはじめはとりあえず黙っておく。

「む、あったでござる。これでござるよ。」

三浦が埃まみれの手でぬっと差し出すそれは薄い黄色の細い紐を束ねたもの。少し黄色っぽく見えるのは、本来の色合いなのかただの劣化なのかはじめにはわからない。

「見つかったなら出ようぜ、喉が痛くなりそうだ。」

「そうでござるな、…っくしょーい！」

三浦の唐突なくしゃみで巻き上げられた埃がぶわりと舞う。忍者の煙幕にも近いものがあった。

「うわぁぁあきったねぇな！」

「こ、これは失敬した！埃が鼻に…くっしょーい！」

「口を手でふさげっつーの！」

「む、そうでござるな！…、む、手についた埃で…くっしょーい！」

消防訓練並みに白くなった視界を必死に泳ぎ、ドアを開けるはじめ。三浦がドアにたどり着く前にさっとドアを閉める。

「あぁ！はじめ殿ぉ！くっしょい！ちきしょい！肺炎になってしまうでござる！」

ごっほごほとむせる声をドア越しに聞いて、はじめはムッとしながらドアを開け放つ。薄煙を上げながらなんとか出てきた三浦はなんだか屋根裏を冒険してきた猫のように白く染まっていた。

「うわー。」

「黒いはずの詰襟が真っ白でござる。…これはこれでありでござるか…？」

「ねーよ。絶対にない。汚いから叩き落としたほうがいいんじゃないか？」

そうでござるなぁ、と三浦は上着を脱ぎその場でバッサバサと振り回した。当然埃は巻き散らかされ、再び視界が白く染まる。

「だっかっら！そういうのは周りに配慮してやれっつーの！」

「おぉ！そうでござったな！ではもう一度。」

「うおおおおい！」

忍び込んでいるはずの武道館で結局ぎゃあぎゃあと騒ぐ二人。もしその騒ぎを聞きつけた教師が二人を見つけようものなら反省室行きは間逃れなかっただろうが、幸いにも誰も来なかった。とりあえず目的のものは手に入れたので、そそくさとその場から去る二人だった。

〜〜〜

学習棟Ｂ－Ｃ棟中庭。

「で？どこが壊れたって？」

「ここでござる。」

中庭のベンチに腰掛け、隠すように置いてあった竹刀を取り出す三浦。ここ、と言いながら指差した先にはぶらんと切れて垂れる紐が１本。

「…これ？」

「そうでござる。これは弦といって竹刀を組むときに大事なものなんでござるよ。これが無いと竹の先端が出てしまって危ないでござる。これを調節して、先革とこの柄革をしっかり引っ張って先端が出ないようにするのでござるよ。」

「ほぉ。なんだかよくわからないが、大事なもんなんだな。」

「そうでござる。竹刀はその名のとおり刀でござる。普段からの手入れを怠るといざというときに役に立たないでござるよ。」

そう言いながら各部の白い革紐を解いていく三浦。はじめにはそれがなにか封印を解いているように見えてほんのちょっと恐怖を感じた。まさかここから刀の怨霊みたいなものが出てこないとは言い切れないような気がしていたが、竹刀がただの竹の塊になってもなにも出てこなかった。はじめは人知れずほっと肩を撫で下ろす。

そんな少年漫画の読みすぎで勝手に心配をしていたはじめをよそに三浦はさっさと竹刀に弦を張り、慣れた手つきで中結いを締めこんでいく。無事修理が終わった竹刀を天にかざし、三浦は満足そうに息をついた。

「ふむ、見違えたぞ。紫龍。」

誇らしげにその身を直立させる竹刀にそう語った三浦をなんだかUMAでも見るような目で見ながらはじめは

「し、しりゅう、ってなんスか。三浦さん…？」

とだけ言った。というか言葉を発した。

そんなはじめの様子にまったく動じず、三浦は満足そうな笑顔で

「紫龍、でござるよはじめ殿。こいつの名前でござる。」

言った。言い切った。はじめは絶句と言った表情で二の句を次げずにいると、三浦はその竹刀、紫龍に向かってなにやら語り始める。

「おぉ、紫龍。弦を換えたお陰で男気が一段と上がったでござるな。まさに竹刀の中の竹刀。大将でござる。これなら主将にも勝てるかもしれないでござるな。…今度はしっかり頼むでござるよ、はじめ殿。お?はじめ殿?どこへ行ったでござるか?…まぁいいでござるか。」

中庭には三浦（と紫龍）だけが残された。

## ～Flash～

学習棟A棟空き教室。

放課後。いつも通りみんながぞろぞろと集まって来るものの、一向に茜が来る気配がない。はじめはとりあえず柊に、「どうしたのか知ってるか？」と目配せしてみるが、ちょっと首を傾げられただけでよくわからない。とりあえずもう少し待つか、と思った矢先、なにやら大きな骨組みのようなものを担いだ茜がガラリとドアを開けて登場した。

「ん～、お待たせ。じゃ、行きましょうか？」

登場するやいなやそんなことを言い放つ茜に、とりあえず聞いてみる。

「行くってどこに？」

茜は骨組みを担ぎ直しながらにこやかに答える。

「着いてくればわかるわ。」

「はぁ…。」

ぞろぞろと廊下を歩いていく。

～～～

大階段。

澄み切った水面に乱反射する西日が幾何学的模様を生み出し、一瞬で消えていく。段を我先にと駆け下りる水面を眺めながら、はじめは茜に聞く。

「んで、その骨組みは何？」

茜ははじめが聞く前にさっさとその骨組みを組み立てていた。それはカメラの三脚で、少し古いものなのか所々がくたびれているように見える。茜はその三脚の上にやはり少し古めかしい一眼レフのカメラを固定する。

「え、カメラ？」

「そう。ほら、はじめ君もみんなと一緒に並んでくれないと。」

「え？」

はじめは後ろを振り返る。西日に照らされた大階段にみんなが2列に座って並んでいた。柊にこっちこっちと手招きで呼ばれたので、空いていた1列目のセンターに座る。

「…なにこれ？」

「わからないのかい？記念撮影さ。」

「いや、それはわかるけど…。」

「まぁ理由は本人から聞いてほしいけど、新しく仲間が来た時の茜の順番の日はいつもここで記念撮影なのさ。写真部の人に頼んで現

像して、大事に保管してるみたいだよ。」

「へぇ。」

「まぁ、今回ははじめ君が増えたからってことさね。古いカメラだけど魂抜かれるわけじゃないから、リラックスして撮られるといい。」

「魂抜かれるってどんな時代だよ…。」

そう言ったところで、柊に正面を向けと指でちょいちょいと合図される。カメラの調整を終えた茜がレリーズのケーブルを手にしながらはじめの隣に座って言う。

「さて、みんな準備いい？撮るわよ～？」

全員が頷いたのを確認して、「はい、チーズ！」とレリーズの先端を押す。バシャン、とシャッターが切れる音がカメラから聞こえた。

一度フィルムを巻きに戻る。じゃあ並び換えてもう一枚、との茜の言葉で前列に中野と関根と風間と茜本人が座り、後列には石田と柊と岡本とはじめと三浦が座って並ぶ。茜はシャッターを切った。

何度か並びを換えて撮り、そのたびにフィルムを巻いて、フィルムが終わったところで撮影は終了する。三脚を畳んで、茜は嬉しそうに「じゃあ早速写真部に現像頼んで来るから！後は各々好きなように。」と言い残して大階段を去っていった。はじめは何の気なしに岡本と運動場を眺める。

「…写真部って知らないんだが、そんなもんあったのか。」

「ん？あぁ学習棟と体育館の前んとこにカタカナのロ、みたいな建物あるだろ？あれ、部室棟なんだ。あそこに写真部がある。」

「へぇ。」

「行った事ないなら行ってきたらどうだ？もう自由行動だしな。」

「…そうするかなぁ。」

「おう。行って来い行って来い。」

「あいよ。」

はじめは大階段を後にして、岡本が言っていた部室棟に入っていく。〜〜〜

部室棟。

朱色に染まる廊下の曲がり角でばったりと鉢合わせるはじめと茜。茜は驚いて目を真ん丸くしている。

「…びっくりしたぁ…はじめ君どしたの？」

「すまんすまん。いや、自由行動ならついて来てもＯＫだろ？」

「まぁ別に構わないけど。でももう現像お願いしてきちゃったから戻るだけなんだけどね。」

廊下に長い影を落としながら、二人は並んで歩く。

「あぁそうなのか。…ちなみに写真部ってのは？」

「うん、ＮＰＣの生徒がやってる部活の１つ。フィルムは用品店で買えるからいいんだけど、現像は写真部にやってもらうとお金かからないからお願いしてるのよ。」

「なるほどな。…なに、茜は写真が趣味なのか？」

「そうね…写真は好きよ。本来一瞬しか存在しない時間を、永遠に保存出来るもの。人の記憶とは違うわ。」

茜の言葉には、ほんの少し冷たさが宿っていた。はじめはそれに気づかない。

「あ～、じゃあ現像終わったら見せてくれよ。っていうか焼き増ししてくれるとうれしい。」

「うん、もちろんよ。っていうかみんなの分も焼き増し頼んであるから大丈夫。
」

「さんきゅ。…今までどのくらい写真撮ってきたんだ？」

「ん～、数え切れないわね。ベッドの下がアルバムだらけになるくらいって言えばちょっとは伝わる？」

茜のその発言にぎょっ、と信じられない表情を浮かべるはじめ。

「え？ってことはなにか。２段ベッドの１段目が全部か！？同室の

奴はどこで寝てるんだよ…。」

「え？ってあぁそうか。はじめ君って今2人部屋だっけ。」

「そうだけど。…え、どゆこと？」

茜はちょっとだけ誇るように胸を張る。顔はにんまり、と笑っていた。

「私、一人部屋だから。」

「えぇー。なんでだよー。いいなぁ女子寮。」

「別に女子寮だから、ってわけじゃないわよ。っていうかどっちの寮も基本的には1人部屋なんだけど、こうも生徒数が多いと2人部屋にせざるを得ないわけよね。」

「ほう。」

「で、2人部屋が割り当てられるのは大体成績が芳しくない生徒とか素行に問題がある生徒ね。はじめ君はここに来てまだ間もないし、っていうかまだテスト受けてないでしょ？次のテストで頑張って成績が上がれば希望も見えてくるわよ。」

「ほほう。」

「まぁ一概に1人部屋がいい、ってわけじゃないけどね。」

「例えば？」

「んー、ルームメイトがいれば…寝坊しそうになっても起こしてもらえる。夜、ふいに寂しくならない。鍵無くしても大丈夫。」

指を折りながらいくつか例を挙げた上で、どうだと言わんばかりに決め顔を向ける茜だが、はじめは呆れのようななんとも複雑な表情を作る。

「…その考えはどうなんだ…？」

「でも一利あるでしょ？」

「まぁな。っていうか一利くらいしかない。」

「まぁまぁ。そうだ、今度見に来る？私の部屋。」

「へ？」

「1人部屋の参考にはなるわよ。部屋の広さとか見た上で、今のまま2人部屋に居るのか、1人部屋に移るのか決めればいいじゃない。ね？」

にこ、と微笑む茜の笑顔に一瞬息も忘れるほど見とれたはじめは、なんと答えるか考える前に大きくうなずいていた。

「ん、じゃあ決まりね。明日はちょっと無理だから、今度ってことで。それでいい？」

「あ、あぁ。」

「ん。じゃみんなも待ってるでしょうし、そろそろ戻ろっか。」

きゅ、と上履きのゴムを滑らせて、茜は歩き出した。

## ～In Your Room～

当日。

学生寮と大食堂を繋ぐ渡り廊下にはじめは立っていた。

エントランスは学生寮の男子寮1号棟と女子寮1号棟の玄関が向かい合っているだけなので、男子のはじめが居てもなんら問題はない。ただ、今の時間は授業中なので、教師に見つかった場合それなりに面倒くさい展開になることは簡単に予想できる。

ましてやこれから女子寮に侵入しようとしているわけで、はじめの心臓は早くもバクバクと早急な鼓動を立てていた。一応、大食堂から誰かが来てもすぐに気がつくように視界を広げてはいるが、それが色々神経を使って疲れる。

『茜、早くきてくれよ～、もうすでに心労が…。』

そんなはじめの気持ちはいざ知らず、茜がゆっくりとした挙動でニコニコとエントランスのガラス扉を開ける。

「や、お待たせ。寮母さんはしばらく来ないと思うから入っちゃって。」

「お、遅いぞ茜！ってしばらく来ないって何やったんだ？」

「ん？最上階の公共トイレにトイレットペーパー詰まらせてきただけよ。」

「…。」

えぇ…？と若干引いてるはじめの手を取り、

「まぁまぁ。いいからいいから、入って。」

寮に招き入れた。はじめは茜の手の柔らかさに感動と緊張を覚えつつ、さらに既に入り口から男子寮のむさい感じとは全然違う女子寮のフローラルな香りに驚きながら、手を引かれるまま階段を登る。

「え、ちょ…。か、階段とか登って大丈夫なのか？見つかったらまずいんじゃないのか？」

「ん～、だから最上階の6階のトイレなのよ。そこまで上るのにわざわざ階段なんて使わないわ。だから逆にエレベーターは使えないのよね。まぁ私の部屋は2階だから階段でも全然大丈夫なの。」

「あ、あぁ。そ、そういうことか…。」

そうこうしているうちにあっという間に2階に着く。茜は探偵かなにかのように、片目だけ曲がり角から覗かせて廊下の様子を伺う。誰も居ないのを確かめてから、廊下に出た。

「なんか、スパイごっこみたいね。」

にこ、と振り返る茜に無邪気さを感じつつ、いろんな意味で心臓バクバクなはじめは曖昧な笑顔を返しながら、

「…まぁ悪いことしてるっていうのは変わらないよな。」

「悪いことってわくわくするわよね…。…ん、着いたわよ。」

茜はガイドのように左手でドアを指す。他のドアと変わらない緑色のドアがそこにあった。茜は普段自分がしているのと同じようにガチャンと鍵を開ける。

「いらっしゃい。はじめ君。」

「…お、おじゃまします。」

茜に気づかれないように深呼吸を1つして、そしてそんなものは全く気休めにもならないほどに高鳴る心臓の鼓動を押し殺して、はじめはドアをくぐった。柑橘系のような香りが鼻をくすぐる。

「おぉう…。」

なにか感動しているはじめをよそに、キッチンから紅茶の缶を取り出す茜。やかんを小さなＩＨヒーターに載せてスイッチを入れた。

「適当に座ってて。今お茶入れるから。」

「お、おう。」

適当に、といわれたものの6畳ほどの部屋に椅子は机に備わっている1脚しかない。まさかベッドに腰掛けるわけにもいかないので、その椅子に座る。大人しくしていればいいのに、きょろきょろと落ち着きなく視線を泳がしまくっていた。

緊張が頂点を越えたのか、それともそうなることを防ぐ為かやたらと饒舌になる。

「間取り的にはあんまり広くないけど、広く感じるな。机とかちょっぴり小さめなんだなぁ。」

「フローリングも俺の部屋より、ワックスが効いてるような…。気のせいかな？」

「っていうか、小さいけどキッチンがあるんだな…。やっぱ待遇が違うような…。」

「2階の割に眺めいいなぁ。俺のところは3号棟だからどうしても前の校舎が邪魔なんだよなぁ…。せっかく丘に建ってるのに、見えるのは2号棟のベランダなんだからなんだかなー。」

ネタも尽きてきたのか、そろそろ黙りこむはじめ。ちょうど紅茶のお湯が沸いたから良かったものの、それがなければ沈黙だけの気まずい空気になるところだったとはじめは少しやかんに感謝する。

「はい、お茶。紅茶でよかった？角砂糖は要る？」

「あ、いやストレートでもらうよ。さんきゅ。」

「どういたしまして。」

茜は自分のベッドの縁に腰掛け、カップに口をつける。小さく「あつっ…」と言いながら一口飲んだ。

「ん、おいし。」

「あぁ。」

ほのぼのとした空気に完全にリラックスしてしまい、しかも先ほどいろいろ一人で喋りまくったせいでのどが渇いていたこともあり、あっという間にカップが空になる。そこではじめはハッと気がついた。

『…俺何しに来たんだっけ。』

緊張のあまり当初の予定がどこかへ吹っ飛んだはじめのあわあわしてる横顔に気づいているのかいないのか、茜はゆったりと紅茶を口に含む。

半分くらい飲んだところでおもむろにスッとベッドから立ち上がり、目の前の椅子に座るはじめにゆっくりと顔を寄せる茜。その行動の意味がわからなくて、セミロングの髪から立ち上る少し甘いシャンプーの香りに鼻先をわずかにひくひくさせながら、はじめは生唾を飲み込んだ。その無意識の自分の行動に気がついたあとで、その音が茜に聞こえていないことを祈る思春期少年のはじめである。

茜は、はじめの後ろにある机に紅茶のカップを置いた。それだけだった。

そしてベッドの脇にしゃがみこみ、下のスペースを利用した引き出しに手を掛ける。

「ベッドの下ってここのことよ、はじめ君。…って聞いてる？」

「うへぁ！あ、あぁ聞いてる聞いてる。…なんだっけ？」

「もう。アルバム見に来たんじゃなかったっけ？」

「あ、あぁそうだった。…どれ？」
これ、といいながら茜は引き出しにびっしり詰め込んであるアルバムをひとつはじめに渡す。アルバムといっても、Ａ４ほどのファイルに写真をぺたぺた貼っていくタイプではなく、ポストカードサイズのポケットに１枚ずつ写真を差し込んでいくホルダー式のもの。はじめはそれをぱらぱらとめくる。
「へぇー。今のメンバーとは顔ぶれが違うんだな。」
「そう。今居ない人はもうここを卒業していったメンバーよ。」
「最初から人数がいたんだな。」
「違うわよ。徐々に増えてっただけ。ここの写真は私がカメラを貰ってから撮りだしたから、最初からじゃないの。」
「あぁ…なるほど。茜のこの飛び切りの笑顔は？」
「あっ…それはこのカメラくれた子が撮ってくれたのよ。」
「ふーん。」
「…は、恥ずかしいから、あんまり凝視しないでほしいんだけど…。」
「お？すまんすまん、綺麗に撮れてるな、と思ってさ。」
「でしょ？いくら練習してもやっぱりあの子の腕には敵わないのよ

ね…。」

「なんていうか被写体がいい。」

「そうね。なんていうかセンスいいのよ。ほら、この川の写真なんかさ。こう、水の柔らかさが伝わってくるっていうか…。」

「…。」

「…あ、ごめん。つい熱くなっちゃって。…退屈よね？」

「あ、いや、そういうことじゃなく。」

「茜を褒めようとしてるんだが、なかなかわかってもらえないもんだな…まぁいいけど。」

「え、なに？」

「なんでもないなんでもない。次のアルバム見せて。」

「ん。」

「お、石田がいる。」

「そうそう、ちなみにそのすぐ後にひーちゃんが来るのよ。ほらここ。」

「ホントだ。」

〜〜〜

あれやこれやと話しながら、アルバムを見ていく。十何冊あったアルバムには様々な写真が収まっていた。

夕日に照らされた学習棟。

澄み切った青空に浮かぶ白亜の雲。

薄緑に萌える新芽。

そして、仲間達の笑顔。

永井茜という少女の、天上学園での全ての記憶がここにあるといっても過言ではなかった。

はじめは、紅茶を入れなおすために小さなキッチンに立つ茜の横顔を遠く見つめる。

―彼女は、この世界でどれほどの時間を過ごしてきたのだろう。

太陽が何回彼女の頭の上を通り過ぎていったのだろう。

風が幾度彼女の髪を揺らし、星が何度その瞳を輝かせただろう。

そんな途方にくれるほどの果てしない時間を経ても、まだ「死」に納得出来ない彼女は、どれほどまでに陰惨な生前だったのだろうか―

そんな想いがはじめの頭をぐるぐるとかき乱し、差し出された紅茶の味さえわからないでいた。

そんななんとも神妙な顔で紅茶を啜るはじめに気が付き、茜はその

顔を覗き込んで、

「どうしたの？もしかしてベロ、やけどでもした？」

首をかしげた。セミロングの髪がさらっと肩から滑る。それに少しだけ見とれたはじめは

「ん？ああ大丈夫、大丈夫。」

小さく首を振って否定した。実際やけどしているかどうかより、「表情の変化に気が付くほどに見つめられていた」ということのほうがはじめにとっては重要だった。彼女の丸い瞳に、自分の心の中を覗かれてしまったような気がしてしまう。

はじめの顎を、軽く持ち上げるようにそっと指で触れて

「だ～め。べーってして？」

茜は優しくささやくように、そう言った。はじめの耳に電気が走ったかような甘美な衝撃が走る。

まるでお姉さんが弟を優しく叱るときのような声のトーンと語尾の上がり方に少しドキドキしながら「べ。」と小さく舌を出すはじめ。そしてその真っ赤な舌をじ～っと見つめる茜。遠くから見たら、初めてキスをするカップルが恥ずかしさに固まっていると解釈されそうな構図だった。

茜との顔の近さに、心臓の鼓動が「とっ、とっ、とっ、とっ」から「ゴッゴッゴッゴッ」に変化していることを耳の中の反響で必要以上に認識しているはじめ。恥ずかしさで思考がどうにかなりそうな

気分だった。むしろ「顔真っ赤で、頭から湯気出てるんじゃないだろうか」とか思ってるあたり、既に思考回路は焼き切れているかもしれない。

「もし、茜がここで目をつむったら、どどどどうしよう。やっぱそういうことか！？そういう展開を見越して紅茶を熱く入れたとかなのか！？ど、どうする俺、どうする？」と変な方向に考えがシフトして、はじめは勝手にさらに自分の鼓動を早めていく。

そして、こんな展開は考えてもなかったはずの茜がゆっくりと瞬きした。

というか血走ったはじめの目には、茜の瞬きがゆっくりに見えてしまった。その瞬間。

ぱんっ、とはじめの中で何かがはじける音がした。

その瞬間、ゴッと椅子を後ろに跳ね飛ばすような勢いで立ち上がる。

「ひゃ！」

奇妙な声を出しながら茜もつられて立ち上がったことで、より2人の顔が近くなる。なにがどうしてこうなったのかわからない茜は「え、ちょっ。はじめくん？」とか言っているが、思考の何かが破断したはじの耳には届いていない。

立ち上がった勢いにバランスを崩し、ぐら、と茜に寄りかかる体勢になるはじめ。

茜の後ろには、先ほどまで腰掛けていたベッドが。

はじめは茜を押し倒すように倒れ、ギシッとベッドが軋んだ。

音が消えた。

2人の鼓動が溶け合うように重なっていく。

「…はじめ、くん？」

返事は無かった。

いや、返事は出来なかった。

押し倒してしまったその瞬間、はじめは頭の中で「やっちまったあああああああああああああああああああああ」と叫んでいた。身体中に浮かぶ冷や汗に少し冷静になった思考を整えて、こうなった挙句の第一声はどうしよう、やっぱり「ごめん」だよな、でも満更じゃなかったらどうする俺。とぐるぐると考えを巡らせて、結局やっぱり「ごめん」と言おうと息を吐いて、吸おうとしたその時。

コンコン、と硬い音が部屋の中に響く。

「ぎッ！！！」

思わず「ぎゃあ！！！」と驚きの言葉を上げてしまいそうになるはじめの口は、茜の手のひらでぐぐっと全力で押さえ込まれた。「ここ、声出しちゃまずいってば！」と小声で言われても、これでは声どころか息すら出来ない。

そもそも息を吸う為に吐いた瞬間だったので肺の酸素量は少ない。徐々に顔は青ざめ、はじめはぐったりしていく。

一方、悪気はないものの完全にはじめを窒息させている茜はドア越しの寮母の気配に警戒しているために、目の前のはじめが少し痙攣しだしていることに気づかない。

限界を感じたはじめが最後の気力を振り絞り、茜の手を引き剥がす。

「ぶはあっ、死ぬ、これはマ」

今度はベッドの掛け布団をどかっと被せられた。はじめの視界が急に真っ暗になる。

「ちょ、暗いっす！」

「いいから黙ってなさい！ここ女子寮よ！？男の子招いたなんてバレたら大変なんだから！！！」

小声で主張し合って、はじめは黙る。寮母さん戻るまで絶対出てきちゃ駄目だからね！喋っても勿論駄目。と言い残した茜に、喋らずに肯定の意を示すと、布団の中で「俺は布団の一部、俺は布団の一部なんだ…」と呪文めいたものを口の中で呟きながら微動だにしな

かった。

はじめの耳に、布団越しにくぐもった茜と寮母さんの会話が聞こえる。どうやらトイレが直った報告らしい。

早々に会話を終わらせた茜が戻ってきて、掛け布団をめくる。ハムスターのように縮こまってるはじめを見て、クスと笑った。

「もう大丈夫だから。」

「よかった…。」

もそもそとベッドから這い出して、また椅子に座りなおすはじめ。対して茜はベッドの縁に腰掛ける。どちらもしゃべらない微妙な空気が流れていく。

カップにもう入っていないはずの紅茶を飲むフリを何度かしてみるが、状況はなにも変わらなかった。はじめは意を決したように、口を開く。

「あ、あのさ。」

「…ん？」

「お、俺そろそろ帰るよ。トイレも直ったみたいだし。」

「うん、わかった。…じゃあ送るわ。こっそりね、こっそり。」

「ん。お願いします。」

カップやアルバムの片付けはあとで茜がやるということなので、早々に部屋を出る二人。来る時と同じようにこそこそと歩き、無事エントランスまで出る。

「ありがと。紅茶美味かったよ。」

「どういたしまして。またいつでも飲ませてあげるわよ。」

「あぁ。じゃあまたあとで。」

会話もそこそこに、はじめは男子寮の3号棟へと向かう。茜はその背中を見送った。

そして、

「またあとで？……あ、授業サボってるの忘れてた…。」

茜は急いで部屋に戻り、片付けもそこそこに学習棟へと向かった。

〜〜〜

## ～Every Time I Look At You～

放課後。

学習棟A棟空き教室。

いつもの面子が集まっている中で、はじめが最後にやってきた。教卓の前に立つ茜がはじめの顔を見てにこりと微笑む。気恥ずかしさからはじめは顔を背けたが、茜はそんなはじめの思いを見越したようにクスッと笑った。

「と、いうわけで全員揃ったわね。今日はついに新参のはじめ君の番だけど、なにかやりたい事はある？というか記憶って戻ったんだっけ？」

はじめはゆっくりと首を振る。

「…いや、記憶はまだ良くわからないんだ。だから何をすればいいのかもわからない。…で、俺はまだみんなに比べてここでの生活は浅い。まだ学園内もよくわからないことばっかりだしな。だから俺の記憶が戻るまで、俺の順番は先送りで構わない。」

「…それでいいの？」

「あぁ。そのほうが有意義だろ？」

「まぁそうだけど。…みんないいかしら？」

それぞれ、まぁ本人がそれでいいならと了承した様子なので、はじ

めは席に着いた。その代わりに柊が茜に呼ばれて黒板の前に立つ。

「というわけで今日はひーちゃんになったけど…、どうする？」

柊は少しの間考えて、

「準備室行ってくるよ。」

茜はうなずいた。

〜〜〜

学習棟A棟B棟間中庭。

暗い校舎の中を廊下側の窓からゆっくりと覗く茜の後ろから、はじめがのっそりと話しかける。茜が大真面目な表情なのに対し、はじめの顔には真剣味が無い。

「で、この夜の校舎侵入ミッションはなんなんですかね。茜さん。」

「しっ、はじめ君。巡回の先生居たら捕まっちゃうでしょ！静かに！」

極めて小さな声でそう言って、茜はひょいっと茂みに隠れる。

「今日はひーちゃんの天体観測なのよ。放課後の後は先生に強制的に帰らされちゃうから夜に改めてこうやって忍び込むしかないってわけ。」

「だからってこんなぞろぞろ来ることないだろ…むしろ目立つだろ…。」

はじめは後ろを振り返る。そこには茂みに隠れているようにしてみんなが縮こまっていた。はじめをいれて総勢１０人居るので、どうしても隠れ切れてない感がところどころ出ている。だが全員大真面目な顔なのではじめは笑いがこみ上げてくるが、ここで笑ったらなにかとても失礼だと思うのでそれをぐっと飲み込む。

「大丈夫そうね…、じゃあ…いくわよ。」

そう告げて茜はカラカラ、と窓をスムーズに開けていく。一瞬のうちに窓枠を飛び越えて、音も無く廊下に降り立った。対面する教室のドアに身を寄せながら、後続にＯＫサインを送る。次ははじめの番だ。

しゅっ、と枠を飛び越えたのはよかったが、勢い余った靴が「きゅっ」とタイルと音を出してしまう。はじめは口の中でやっちまったッ…と呟きながら、教室の中に滑り込むように駆け込んだ。

「……。」

茜と背中合わせで廊下の先に目を凝らし、誰も来ないことを十分確認してから、安堵の息を吐いた。茜の指示で、次は関根が石田に持ち上げて貰って校内に入る。

そんなこんなでスームズとは言いがたいが全員が進入に成功した。

〜〜〜

学習棟Ａ棟屋上。

星が近かった。ただひたすらに。

「……。」

「…はじめ殿、急に止まらないでほしいでござるよ。暗いので気をつけて歩くでござる。」

「…あぁ、ごめん。」

屋上には既に望遠鏡がケースごと置いてあった。柊はそれを暗闇の中テキパキと組み立てて行く。他のみんなはそれを手伝うこともなく、缶コーヒーを飲んだり星を眺めたりしている。はじめは空を覆うように、世界を侵食するように広がる星を眺めていた。

「…、すげぇ…。」

口をぽっかりと開けて少々間抜けそうな顔になっているが、そんなことはお構いなく星を見続けるはじめの隣に岡本が立つ。

「おっ、はじめ。星を眺めるのは初めてなのか？」

「おぅ、岡本。こんなに見事な星空は見たことがないな…、…たぶん。」

「たぶん、て。」

「記憶無いからな。それにしてもすげぇ。」

岡本も並んで口をぽっかりと開けながら空を仰ぐ。

「有り体だけど、バケツひっくり返したような星空だよな～。」

「…それは大雨が降ってる時にいう形容詞なんじゃないのか？」
「バケツいっぱいの金平糖をばら撒いたらこんな感じになるんだよ。」
「そうか。それほどまでの量は食いきれ無いから、風間に手伝って貰おう。」
「え、なに？呼んだ？」
ぽっかり開いている二人の口にキャラメルを放り込みながら、風間が現れる。
「おいし？」
「…うん、うまい。」
口の中でキャラメルをころころと転がす。頬を緩ますはじめと何故か眉をしかめる岡本。
「よしよし。…で岡っちはなんでしかめっ面？」
「俺、もう歯磨いてきちまったんだよ…。キャラメルなんぞ食べたらまた磨かなきゃじゃんよ…。」
「ありゃ。そりゃごめん。」
ぺろっと出す風間の舌にもキャラメルが乗っていた。

「まぁいいだろ岡本、あとで磨きなおせば。」

「むぅ。」

「そうだよ、ほらもう一個あげるから。にひひ。」

「いらんっつーの。」

風間が差し出したキャラメルをぐいーっと手で押しのける岡本。押された風間の手は反対側にいた森にぎゅっと掴まれる。

「岡本君がいらないのであれば僕がもらいましょう。」

森はキャラメルの薄い包装を丁寧に開けて口に放り込む。元より薄笑いを絶やさない彼だが、わずかに上がっている口角がよりくいっと持ち上がったように見えた。

「うん、美味しいですね。」

にこにこしている森に対し、少しジト目を向けて

「森っち…あたし食べていいよなんて言ってないけど？」

「あれ、駄目でした？…じゃあ代わりにこれをプレゼントしましょう。」

森はポケットから小さなチョコを取り出し、風間に渡す。満足気に風間は頷いてそれをポケットにしまいこむ。

と、そこに

「あー、あたしも森君のチョコ欲しいなー。」

「……。」

眼帯少女中野と無口少女関根がの二人がやって来た。

森はポケットから2つチョコを取り出して、中野と関根に渡す。背の低い二人にわざわざ目線を合わせるように腰を落として丁寧に手渡した。

「わーい、ありがと森君！」

「……。」

「いえいえ。…石田君も食べますか？チョコ。」

「…いらん。」

二人の後ろに用心棒のように控えている石田は、―ちなみにシャワーを浴びた後なのか、いつものリーゼント頭では無くなっている―うれしそうにチョコを食べる関根を見て、ほんの少し目尻を下げた。

「チョコを携帯してるなんて、森って女の子っぽいんだな。」

「えぇ、常に何かしら持ってますよ。はじめ君もおなかが寂しい時は遠慮なくどうぞ。何かあげますから。」

「さんきゅ、そんときになったら考えるよ。」

「…ちなみにこの森君のチョコは購買じゃ売ってないんだよ。」

ぬっ、と会話に混ざってくる中野はただでさえ小さいチョコをなぜかリスのように半分だけかじっていた。

「売ってない、ってどういうことだ？」

「自家製というやつです。」

「えっ、チョコを？わざわざ？」

「森は和洋折衷お菓子まで何でもござれだからなー。はじめも食堂に飽きたら森の部屋行ってみろ。とりあえず旨いものが出てくるから。」

「そういう岡本君は先週いきなり来ましたよね。たしか鯛茶漬けを出しました。」

「…すげぇな…。いきなり来た奴に鯛茶漬けって…。」

「まぁ余りものですから。」

森の部屋の冷蔵庫にはなにが入っているのかと考えながらはじめは小さくなったキャラメルを飲みこんだ。

〜〜〜

「みんな、用意できたわよ。」

そう呼ぶ茜の声で、みんなが集まる。柊は組み終えた天体望遠鏡から目を離してふっと息を吐いた。長いポニーテールが揺れる。

「準備、出来たよ。こっちは月を、そっちは火星が見れる。」
2つの望遠鏡に手のひらを差し向けて、「好きに見るといいよ。」と柊は言った。風間と中野の感嘆の声を聞きながら彼女は下がって、今の時間は動いていないクーラーの室外機に背中を預けて座り込んだ。

寂しそうに空を仰いで、小さくため息をつく。そこに、少し冷めた缶コーヒーを茜は差し出した。自分の缶コーヒーをぱきゅ、と開けて一口飲んで柊の隣に座る。

「明日も、午前中は自主休校の予定？」

「…あぁ。今夜も遅くまで眺める予定だからね。」

「了解、ノートは取っておくから。」

「ん、ありがと。いつも悪いね。」

「いいのよ。」

柊はコーヒーの口を開ける。温くてほんのり甘いコーヒーで唇を濡らして、ふっと息を吸う。深夜の少し冷たい空気が肺に落ちてくる。視線の先には、代わりばんこで望遠鏡を覗く仲間が映っていた。

「今までも、あの月は変わらない。そしてきっとこれからも変わらない。そもそもあの月がこの世界に実在しているかはあたしにゃわからない。…そんなものを見続けて、いつか答えが出るのかね…？」

「今までだってあの月は夜を照らしてきた。明日も、一週間後も、来年もきっとずっと変わらずに。…でも、それを見つめるひーちゃんが少しでも変われば、あの月の見え方が変わるかもしれない。そうしたら、今までとは違うなにかにたどり着けるかもしれないわ。」

「…。」

柊は何も言わずコーヒーを口に含む。

「いつか、弟さんの声が聞こえるかもしれない。あなたに、もう苦しまなくていいんだよ。って声が。」

〜〜〜

## ～Bark At The Moon～

柊　静香。

彼女には最愛の弟が居た。２つ違いの、大事な弟。

小さい頃から星や宇宙が好きで、物心付くころには「将来の夢は宇宙飛行士になること。」と屈託なく笑う、とても素直な弟だった。

柊はそんな弟を可愛がり、そして弟も姉を慕った。活発な姉と純朴な弟は近所でも有名な仲良し姉弟だった。お互いに成長してもその仲は悪くならず、二人はいつでも一緒だった。

そんなある時のこと。

柊は高校2年生。弟は中学3年生の夏。

幼い頃の夢を叶えようと、受験勉強に勤しむ弟を何か気晴らしに連れて行ってあげたいと柊は思いついた。

姉として、勉強面で頼りになってやりたかったが、小さい頃から弟のほうが成績は良い。なぜか柊が勉強を教えて貰うこともややあった。なので勉強面ではない何かで彼を応援してあげたいと思った。

「…なぁ優貴、今度の土曜空いてるかい？」

ノックもせずに部屋に入ってきた姉に嫌な顔ひとつせず、カレンダーを見る。「家庭教師」や「図書館」という文字が書いてある中で、

土曜日にだけは何も書いていなかった。

「ん…特になにもないみたい。どうかしたの？」

「よかった。いやさ、あんた最近勉強勉強で肩がこるだろうから、ちょっとどっか出掛けないかい？」

そう言う姉の言葉に、優貴はぱっと笑顔になった。幼いころと変わらない屈託のない笑顔。柊はこの笑顔が好きだった。

「ほんと、お姉ちゃん！？」

「あぁ。ほんとさ。バイクでびゅーんとどっかに行こう。」

右手でスロットルを握る仕草をして、柊は笑った。優貴はぱたぱたとカレンダーに駆け寄り、マジックで「お姉ちゃんとお出かけ！」と書き込む。そして姉へと振り返り、にこっと笑った。二人で笑いあった。

〜〜〜

土曜日。

車庫の前で、暖気を終えた機体のマフラーから規則的などっどっどっという太い音を響かせている隣で、柊は優貴にジェット型のヘルメットを被せていた。自分はダックテイルヘルメットにサングラスをかけて、シートに跨る。後ろに乗った弟の重さを背中で感じて、ゆるくスロットルを開放する。よく言えば優雅に、悪く言えば鈍重にバイクは走り出した。

それなりに長い道のりを時々休憩を挟みながら走る。

「お姉ちゃん、結構遠いけどどこ行くの？」

「内緒だって言ってるだろう？着いてからのお楽しみさ。そうだねぇ…、また明日から頑張れるような感動を味わえる所、さね。」

「ふーん、楽しみだなぁ。」

「昼には着くさ。朝から走ってるからお尻疲れるだろうけど、もうすぐだから。」

「うん。」

〜〜〜

排気ガスにまみれていた風がどこか潮の香りを感じるようになって、優貴は遠くに目を凝らす。立ち並ぶ家々のわずかな隙間から光が乱反射しているのを、バイザー越しに見た。

「ねぇお姉ちゃん！もしかして、ここって海！？」

風に負けないように叫んで、柊はその声に頷いた。口元がゆるく微笑む。

目指すものはもう目の前であることはあえて言わないで、柊はスロットルを大きく開放した。伸びやかにバイクは加速していく。

〜〜〜

「優貴、そこに立ってごらん。」

「う、うん。」

丘に作られた公園の中の、タイルで彩られた展望台に優貴と柊は立つ。足元には青い星のパネルがあった。

「ふわぁ…、すごい…。」

二人の目の前には、ただ空と海しかなかった。視界を覆うほどの青と蒼が交わる境目は、緩いカーブを描いている。それは自分の立っている惑星の輪郭。流れる雲は山を越えるように水平線の向こうへと消え、波は一面の青に混ぜるように白く押し寄せてくる。

普段は感じられない惑星の「丸み」を、目で、耳で、肌で感じることが出来る。

瞬きすることも忘れたように、ただ景色を見つめ続ける優貴の横顔を見て柊は満足気に微笑んだ。そして自分もその景色を堪能する。

「ほんとに丸く見える…。」

「…ここは地形的に、出島みたいに突っ張り出ててね。こういう風に星がまあるく見えるんだそうだよ。…どうだい、感動したかい？」

「うん、うんっ！すごいよ！ありがとうお姉ちゃん！」

感動で涙目になっている優貴に抱きしめられて、一瞬目を丸くした柊は、照れくさそうに優貴の頭をわしゃわしゃと撫でまわした。

〜〜〜

「さて、遅くならないうちに帰るとしようか。息抜きで疲れちゃ元も子もないからね。」

「うん。」

視線をまだ名残惜しそうに海へと向けている優貴の頭をこつんと叩き、「またいつでも連れて来てあげるよ。」

ヘルメットを深く被り、柊はそう言った。

〜〜〜

柊は道路の真ん中に倒れていた。

黒い額縁に彩られたような視界が、擦り切れる寸前のビデオテープのようにノイズ交じりに見えた。その向こうで、同じように誰かが地面に倒れている。

何人かの人間がその誰かに掛け寄り、必死の形相で何かを叫んでいるのが、ドア越しのようにくぐもって聞こえた。

その内何人かが柊の下にも集まって、なにか大声で叫ぶが、遠くかすれて聞こえない。自分がその声になにか答えることが出来ているのかすらわからない。

クラクションと声が幾重にも聞こえ、こだまのように響く。

重力が何倍にも増えたような、それでいて宙に浮いているような違和感に囚われたまま、柊の意識は海に沈むように消えていった。

〜〜〜

柊は薄く息を吐く。

隣で茜は何も言わずに座っていた。嫌な沈黙ではなく、何も言わなくてもわかっている、そんなような沈黙。

「…いつか、そんな日が来る時まで、あたしは月を見つづけるよ。…あの子のためにもね。」

「…うん。」

月はもうすぐ、夜の真上へと登る。

〜〜〜

## ～Friends To Be Friends～

学習棟A棟2階、掲示板前。

「お知らせ」と書かれた掲示板の前に、岡本、森、三浦、はじめ、中野が居た。むむむ…と難しい顔をしながら、なにかを覗き込んでいる。

「定期テストの時間割…。発表されたな…。」

そういう岡本の声に、はじめ以外の全員がうんうんと頷き、

「数学が1時間目なのは鬼門でござるな…、1分でも多く足掻きたい所なのでござるが…。」

「三浦君の場合、足掻くとかそう言う以前に数学が苦手すぎるのでは？そもそも算数から苦手でしょう？」

結構酷なことをさらりと言い放つ森に、なにも反論出来ないまま三浦は「むぅ。」と黙る。

「で岡本君はこの時間割をどう見る？あたし的には歴史に重きを置きたい所なんだけど。」

「それはお前が苦手だからだろ。俺は英語と数学と科学と古文と歴史と英語に重きを置きたいところなんだが。」

「岡本、それほとんど全部の教化じゃないのか？しかも英語二回言ってるし。…そんなに苦手なのか？」

「…言い間違えただけだよ。…とにかく、ここをどうにか突破しないとやばい。それはみんなわかってるな？」

はじめ以外の全員がうんうんと強く頷く。

話に置いてけぼりになったはじめが肩をすくめつつ聞く。

「…岡本、なにがそんなにやばいんだ？」

岡本は「なんにもしらねーヤツは幸せでいいなぁ、おい」といった感じのため息をつく。

「いいか、はじめ。お前が昼に食べたラーメンライスたくあん付はいくらだった？」

「３６０円。ラーメンが２１０円でライス（大）が１５０円。たくあんはライスに付いてきたやつだからノーカン。」

「よろしい。…じゃあそのお金はどこから出てくる？」

「は？…おふっ。」

口をぽかん、と開けて思考停止するはじめのおでこにチョップをぶちかましながら、

「いいか、はじめ。この世界は実力社会なんだ。甘ったれた考えはもう捨てるんだ。いいな？」

岡本は演技ぶってそう言ってポーズを決める。全体的に仰け反って

立ち、尚且つフレミング左手の法則みたいな手を存在しないメガネをクッと持ち上げるように顔に当てて、視線は虐げるような哀れみの色。なにかの決めポーズのようだがはたしてそのポーズになんの意味があるのか、本人を含めたその場にいる全員がわからなかった。

「…、で、なんだ。」

冷めた視線を送り、冷たく言い放つはじめ。岡本は咳払いをする。ポーズも解く。

「いいか？支給される額も、部屋の配分も基本的に成績に比例する。…まぁ他にも皆勤賞ならプラスされるし、なにか賞を貰ったらそれもプラス査定。委員会もそうだ。」

「ちなみに、生徒会長はかなりプラスされるようですよ。まぁそもそも成績優秀じゃなければなれない役職なんですが。」

横から森も顔を出す。

「そういうこと。だから、俺らみたいに成績が芳しくない生徒は毎回毎回テストの度に頭を悩まされるってわけだ。下手したら、毎月毎月月末になったら食うものが無くなって餓死するかもしれん。」

「まぁそのうち生き返るのでござるがな。」

能天気に「はっはっは。」と笑う三浦を裏拳で沈めて、岡本は深刻そうに眉根を寄せる。

「というわけだ。わかったか。」

「…つまりお前はバカだと。…そういうことだな。」

「極解だけど、まぁ間違っちゃいないな。そりゃ森のところに飯をたかりにも行くってもんだ。」

「ちなみに京都ではお茶漬けを出されるということは、帰れと言われてるのと同じことでござる。」

「じゃあ岡本は帰れって示されたのにも関わらず、鯛茶漬けを平らげた挙句、さもすばらしいことのように言いふらしてるってわけか。」

「そういうことです。つまり。」

「アホでござる。」

「アホだな。」

「アホですね。」

ハモる三浦とはじめと森。隣で中野も「やーいばーかばーか」と岡本を指差している。岡本は肩を震わせながらただ一言。

「そんなにいじめると泣くぞ。」

〜〜〜

学習棟A棟3階空き教室。

「というわけで、テスト週間です。なので、テストが終わるまでみんなで勉強会だけど、良い？」

黒板にテストの時間割を書き終えた茜は、手についたチョークの粉をパンパン払いながら言う。誰からの反論があるわけでもなく、肯定の空気が流れる。

「それじゃ、始めましょうか。まず…なにから始める？」

「はいはいはい！英語で！英語でおねがいしゃす！」

岡本が物凄い勢いで挙手をすると同時に懇願にも似た発言をする。そんなに英語苦手なのかよ…とはじめは思ったが口にはしなかった。

「岡本君ってほんと英語苦手よね…いや、全般的にアホなのはみんなが認めるところだと思うんだけど。…じゃあ英語でいい？」

「岡本の希望を通すってのがいまいち気に食わないけど、まぁいいんじゃないかねぇ？あたしは特にそんな切羽詰まってないから。」

柊がやれやれと肩をすくめつつ言ってなにやら岡本が「なんだその態度はー！なんだその余裕っぷりはー！」とブーイングを返すが、柊はどこ吹く風で全く気にも留めない様子。

そんないつもの光景を横目に、はじめは英語の教科書を鞄から引っ張り出す。授業は比較的真面目に出ているので、それなりに使用感がある。と、そこに茜がにゅっとプリントの束を差し出す。

「じゃあ早速問題ね。はじめ君配ってくれる？」

「え、茜、問題用意してきたのか？」

「もちろんよ。みんなで勉強する時はいつもこうなの。ちゃんと回

収して答え合わせもするからね？」

「へぇー。」

はじめは机の間をすり抜けるように全員にプリントを配り歩く。配り終わって、自分の席に戻ってきて、改めてそのプリントを見た。

「…わりとちゃんとした問題だな…。」

「じゃ３０分一本勝負ね。最下位はみんなにデザートを奢るってことで。スタート！」

解答用紙にペンを走らせる音だけが響く。

〜〜〜

答え合わせをして、全員がそれぞれの点数を黒板に書いていく。

点数を見て、はじめは岡本の肩をぽんと叩いてこう言った。

「俺、プリンな。」

〜〜〜

冗談ではなく汗が吹き出るほどに辛い激辛の麻婆豆腐を、なんの反応も無くすいすいと食べる関根の口をハンカチで拭いながら、茜は対面に座るはじめを見る。

「それにしてもはじめ君って結構英語得意なのね。てっきり岡本君と変わらないくらいかと思ってたんだけど。」

「あぁ…なんでか俺もよくわからん。でも結構難なく解けた。」

「もしかしたら生前は英語が得意だったのかもしれないわね。英語になにか思い入れがあれば、なにか生前の記憶が思い出せるかも。」

茜はハンカチをしまう。関根はまた黙々と悪魔の血のように真っ赤に滴る麻婆豆腐を口に運ぶ。表情は全くもって変化しない。

「…そんなもんか？」

「そうよ。記憶はそういうひとひらの断片から引き出されるものだから。」

「ふぅん。じゃあ英語のテスト中にいきなり生前の記憶がよみがえるとか？」

「なにか強く思い入れのある単語が出てきたりしたら、一気に引き出されるかもね。なにがそのきっかけになるかはわからないけど。」

「そうか…。」

「そうよ。…そういえば、もしこのテストでいい結果が出たら1人部屋に移れるかもしれないわよ。頑張ってね。」

「あぁそういえばそうか。…うん、頑張ってみる。」

茜の部屋での出来事を思い出して、少しだけ頬が緩むはじめ。だがその幸せ気分を崩すように、肩につんつんと箸が刺さる。

「なぁはじめ～、今は違う部屋だけどさ、次は同室になろうぜぇ～？ルームメイトってやつだよ～。」

全員分のデザートを奢らされて、カード残金が完全に素寒貧になってしまったらしい岡本がふにゃふにゃと肩を突いてくる。はじめはプリン用の小さなスプーンで受け流しながら、話も受け流す。

「俺は1人部屋に移りたいからな、残念ながらその話には乗れないぞ。」

「え～、つれないこと言うなよ～。っていうか今はじめってルームメイト欠けてるんだろ？代わりに俺がはじめの部屋に行けば万事解決じゃん。俺あったまいい！」

勝手に発案して勝手に盛り上がる岡本の肩をつつつん！と突き返し、

「勝手に決めんなっつーの、俺は1人部屋のが気楽なんだよ。」

「いーやもう決めたっつーの。今夜からはじめの部屋に移り住むと俺は今ここで決めた。」

「じゃあしっかり鍵を閉めさせて頂きます。あしからず。」

「こっそり開けさせてもらうのであしからず。」

「チェーンロックかけとくのであしからず。」

「引きちぎるのであしからず。」

「そんなことしたら修理代でますます残金減るけどいいのか？」

「…いいわけないだろっ。」

こんな感じでコントのように会話を繰り広げる岡本とはじめを微笑ましく見ながら茜は隣の柊に話す。

「はじめ君、ずいぶんみんなと打ち解けたわね。」

「そうだねぇ…順応性が意外と高いってもんだねぇ。」

夕飯は賑やかに進む。

〜〜〜

## ～Hot For Teacher～

学生寮3号棟廊下。

「…というわけで来ました。」

ドアの前でにこにことバッグを2つ下げて立つ岡本に、はじめは呆れ顔を向ける。

「…来ました。じゃねーよ。こんな時間に何の用だよ。」

「いやだから、行くって言ったじゃん。」

「ほんとに来るなよ…、しかもこんな時間に…。」

はじめは一度顔を引っ込め、部屋の中の時計を見る。針は23時を示していた。

「ちゃんと伝えといたはずだぜ？さぁさぁ、そのチェーンロックを外すのだ。」

「へいへい…。」

はじめは一度ドアを閉める。防犯の為、そうしないとチェーンロックは解除出来ない。だが、3分経っても5分経ってもそのドアは開くことは無く、岡本の頬に冷や汗がたらりと落ちてくる。

「あの～、はじめ？そろそろ空けてくれないと、腕が辛くなってきたんだけど…。」

制服などが入っているだろうバックをぷるぷるさせながら、懸命にノックするが、中からは何の応答もない。

「は、はじめ？お～い？誰もいない廊下は寂しいんだぞ～？」

それでも応答は無い。岡本はしょんぼりと肩を落とす。きゅ、と踵を返して

「わかったよ、はじめ…。帰るよ…。でも同室の奴にはもう話付けちまったし、今更帰りづらいから今晩は森のところにでも泊まらせてもらうわ…。じゃあな…。」

とぼとぼと廊下を歩き去る岡本の背中に、ドアの開くわずかな音が聞こえた。

「…冗談だよ、帰るのは明日でもいいから、今晩くらいは泊まっていけばいいだろ…。」

少し照れくさいような表情でドアを開けたはじめからは伺えない角度で、岡本の口が三日月のように湾曲する。瞳は夜闇に浮かぶ化猫のように怪しい光を零していた。そして誰にも聞こえない小ささで「作戦成功…。」と呟く。

～～～

「じゃあ俺ベッドの下なー！ひゃっほーう！」

どたんばたんと騒ぐ岡本の頭を引っぱたきながら、

「うるせっつーの、隣に迷惑だ！ついでに俺も迷惑だ！」

「あ、俺まくら変わったら寝れない派だからさ、ちゃんと持ってきたんだぜ。」

がさごそ、と鞄の中から枕を取り出してひょいっと投げる。2段ベッドの上に当たり跳ね返って再び岡本の腕の中に納まった。

「知らねーよ…。つーか、まくらが変わっただけで寝られないような繊細さの癖してなんで縛られたまま寝てたんだ？」

「あぁ、アレは演技。」

「しかも演技かよ。…まぁなんでもいいけどよ…。」

「なぁなぁはじめー、洗面所に歯ブラシが2本あると、なんだか同棲みてぇーじゃね？」

呆れるはじめをよそに、小さなキッチンの脇にあるはじめの歯ブラシ置きに自分の歯ブラシを並べてみる岡本。岡本の歯磨き粉がないところを見ると、共用するつもりなのかもしれない。

「あーもー、うっさい！これ以上騒がしくするなら廊下で寝てもらうぞ。」

「それは勘弁。」

「じゃあさっさと寝る。」

「了解しましたよっと。」

はじめはパチンとスイッチを切る。薄いカーテン越しに、月の柔らかな光と、2号棟にぽつぽつと浮かぶ誰かの部屋の光が見えた。

ほんの少しうとうとと眠気が寄ってきたはじめの耳に岡本の声が聞こえた。誰に言うわけでもない小さな小さな囁き。

「あったけぇなぁ…。」

はじめは何も言わなかった。

〜〜〜

大階段。

遠くまで晴れ渡る青空の下、はじめと茜は隣り合って階段に腰掛けていた。たまたま食堂前で会い、そのまま一緒に昼食を取った後だった。

「そう、じゃあ岡本君はほんとにあの後はじめ君の部屋に行ったんだ。」

「あぁ、朝も大変だった…。起きないし、寝癖凄いし、歯ブラシ間違えるし…。」

ぼやくはじめを見てくすくす笑う茜。セミロングの髪が風にふわりと揺れる。

「最初は全然話さないしどうなっちゃうかな、と思ったけど仲良くなってくれて良かった。意外と岡本君も寂しがり屋だし。」

「まぁテスト終わるまでだからいいけどさ…。」

「ん、やっぱり1人部屋希望？」

「出来れば。」

「二人部屋も賑やかで楽しいと思うけど？」

「まぁ、な。」

「じゃあテスト勉強頑張らないといけないわね。」

「そうだなぁ。」

茜はスカートをぽすぽすと叩きながら立ち上がる。はじめも少し遅れて慌てて立ち上がった。

「ん、どっか行くのか？」

「うん。勉強を頑張りたいはじめ君のために、また先生に小テスト作って貰ってくるわ。」

「あぁ、この前のか。」

「そ。この前は英語だったから今回は数学あたりかしらね。」

二人の足は教員棟へ向く。

〜〜〜

教員棟一階職員室。

「おお、そうか。じゃあ放課後までに作っておくから、後で取りに来なさい。」

「ありがとうございます。」

「いやいや、真面目で結構結構。頑張れよ。」

「はい、頑張ります。失礼します。」

カラカラ、と引き戸を開けて茜が職員室から出てくる。廊下で待ってたはじめを見て、「ＯＫ」と指でサインを送った。

「意外と簡単に了承してくれるもんだな。」

「うん、頑張る生徒には優しいものなのよ。」

「頑張らない生徒には？」

「あまりにもサボりが多かったり、素行が悪いといろいろ目をつけられるわね。」

なぜかはじめの脳裏に、石田が教師にうるさく言われている光景が浮かぶ。

「どしたの？」

「あ、いや。あんな格好の石田は目を付けられてるんじゃないかと。」

「あぁ、全然そんなことないわ。むしろ気に入ってる先生もいるし。」

「え。」

「石田君の小テストの点数見た？」

「いや…岡本のは見たけど。」

「９５点よ。実はあんな格好して頭良いんだから困っちゃうわよね。だから判らないことがあれば石田君に聞くのもお勧めよ。教え方は大雑把だけど。」

「…遠慮しとくよ。」

はじめは肩をすくめながら軽く顔を横に振る。茜はそうよね、と前置きしてはじめの顔を覗く。

「…ところではじめ君、午後は開いてる？…抜け出しちゃわない？」

周りに誰もいないのに、内緒話をするようにこっそりと耳打ちをする。唇から漏れた吐息が耳に触れて、はじめは少し頬を赤らめる。

「え、…ま、またお茶会か？」

僅かな期待を、大きくなる心音がばれないように平常心を装って口にするはじめ。にこっと微笑む彼女の顔に、その期待は緩む頬から飲み込んだ生唾を通して胸いっぱいに膨らみ、

「図書館でテスト勉強しましょ？」

見事に打ち砕かれた。

肩から崩れ落ちるはじめに首を傾げながら「どうしたの？」と聞くも「何でもありませぬ…」と答えが返ってくるばかりでますます首を傾げる茜だが、“男の子の淡い期待”に気が付いたのか、ぽつりとこう言う。

「…お茶会はまた今度ね。その代わりテスト頑張ったらご褒美、あげる。」

がばぁ！っと操り人形が術者を取り戻したかのように起き上がったはじめは、びしっと背筋を伸ばし完璧な敬礼をする。

「小生、頑張らさせていただく所存でございます。」

「ちょ、どうしたの言葉遣いが三浦君みたいになってるけど！」

「なんでもありませぬ、さぁ参りましょうぞ。」

茜の言葉にどこかネジが外れてしまったはじめは、やや千鳥足気味に図書館へと歩いていった。

〜〜〜

学生寮3号棟。

「で、いちゃいちゃしながら図書館でお勉強してたわけですか。」

「別にいちゃいちゃはしてない。」

「授業もさぼって。」

「…はい。」

「すさまじい余裕っぷりですなぁ。はじめの先生よぉ。」

「…余裕無いから勉強してたんだろー。」

ぼそっ、というはじめを岡本はギラッと睨み付ける。

「話を聞く限り、勉強っつーかいちゃいちゃが優先じゃねーか！なにがご褒美あげる（はぁと）だ！このやろう！」

「ちょ、ちょっと待て、誰も（はぁと）とは言ってないだろ！」

「顔をにやにやさせながら話してたのは、ど、こ、の、誰、だ、よ！」

はじめは自分の頬を両手でむぎゅっと押さえる。

「…にやにやしてた？俺。」

「無論。」

「…そうか…そうなのか…。」

落胆するフリをして、また頬をにやっとさせるはじめ。茜のご褒美（はぁと）発言を脳内で反芻しているようだった。その様子を見て、岡本が悔しそうにばりばりと後頭部をかきむしる。

「あーーーッなんかいらいらするっ！」

「…なんだよ。」

「なんでもないですー。でも無性にいらいらする。」

「そうか。」

「…風呂行ってくる。」

「おう。」

にやにや顔が治まらないはじめを1人、部屋に残し岡本はさっさと大浴場へと向う。

〜〜〜

大浴場。

「おや。」

「お？」

人がまばらな浴場には、長い髪を器用に結い上げて、腰にタオルを巻いている森が居た。中性的な顔と結った髪がやけに女性的なのに筋肉が締まった体がとても男性的なので、古代の石像のような美を感じなくも無い。

「あいかわらず、女子みたいなことしてんのな。」

「蒸すと髪にいいんです。…はじめ君と同室になったのではなかったのですか？今夜は１人で？」

「あぁ、あいつは１人で幸せ回廊めぐりしてるよ。…ところで森、もう出るんじゃないのか？」

がしがしと頭を洗いながらシャンプーが染みないように細く目を開けて、隣に座る森を一瞥する岡本。その森はというと、特に何をするわけでもなく椅子に座り、いつもの薄笑を絶やさない。

「いえいえ、トリートメントが浸透するのを待ってるだけですよ。しかもまだ僕は湯船に入ってません。岡本君が洗い終わるのを待ってますよ。」

「そうか。」

手荒く洗った髪をシャワーで流し、ボディソープを手に取る。森を待たせまいと、意識的に早くしているのが見受けられた。

「それで、幸せ回廊めぐりとはなんですか？」

「あぁ…それはな…。」

〜〜〜

湯船。時折天井から落ちてくる雫を背中で受けながら、森と岡本は湯に浸かっていた。森は頭にターバンのようにタオルを巻いていて、髪を蒸している。後から入ってきた他の生徒が森の姿を見て一瞬ぎ

ょっとするのは、彼が女子に見えたからなのかもしれない。当の本人は、そんなことは慣れっこといわんばかりに全く気にする様子も無く、隣の岡本に話す。

「まぁそんな露骨に幸せそうな顔されたら、ちょっといらいらするかもしれないですね。」

「あぁ、そりゃな。」

「はじめ君は茜さんが好きなんですかね？」

「そうなんじゃないか？あんなにうれしそうだったし。」

岡本はお湯に漂うタオルくらげをぶしゅぶしゅと潰している。

「まぁ明朗な方ですからね、茜さんは。まだこの世界に慣れてない彼にはとても心強かったんでしょう。」

「…そんなものか？」

「恋なんて何がきっかけで落ちるか判らないですよ。まぁこの世界で愛が成り立つのかは判りませんが。」

「…どういうことだ？」

「はじめ君が茜さんを好いていても、茜さんがはじめ君の想いに答えれるか、という
うことです。逆に言えば、この世界で失恋をしたらどうなるんでしょうかね？」

「考えたことも無い。」

「岡本君はこういうの疎そうですからね。…まぁ茜さんもご褒美とかいうんですから、嫌いなわけじゃないでしょうが、彼女は博愛的なところもありますからね…。」

「…難しい問題だなー。」

天井を仰ぐ岡本の額に、ぽたりと雫が落ちてくる。表情を変えないままタオルくらげで拭った。

〜〜〜

学習棟A棟3階空き教室。

「というわけで、小テスト第二段いくわよ〜。みんな用意はいい？」

茜は約束通り作ってもらった数学の小テストを配り、自分も席に座る。時計の針を見て、「じゃあ、…開始！」

教室がペンの硬い音に沈む。

〜〜〜

「…ふむふむ。はじめ君は生前それなりにいい成績だったのかもね、英語も数学も特に問題ないかも。…岡本君も…、この前の英語の汚名は少し返上出来たみたいね。」

黒板に書かれた各々の点数を見つつ茜が言う。岡本はふふん、と誇らしげに胸を張った。

「昨日の夜、はじめに教えて貰ったんだ。教え方が上手いからすぐ理解出来た気がする。」

「褒めても何も出ないぞ～。」

「照れんなよぅ。」

後ろ頭を掻くはじめを肘でつつく岡本。そんな二人を見て茜は目を細める。

「なんだか、二人は兄弟みたいでござるなぁ。」

「だねぇ、なんだかイケないこと想像しちゃうよねぇ。」

微笑ましいものを見るような表情で二人を見る三浦と中野の視線が妙にむかつくので、おでこにでこぴんを食らわす。ぺちーん、ぱちーん、と間抜けな音が響いた。

「まぁ何を言われようと、今回は三浦がドベだからな。俺はカップゼリーで頼むわ。」

「あたし、アイスでお願いね。」

岡本と中野に肩をポンと叩かれてうなだれる三浦。先ほど一緒にニヤニヤしていた中野がちゃっかりアイスを要求しているところに、はじめはたくましさを感じざるを得ない。

～～～

そして、テストが始まる。

1人部屋がどうとか、支給額がどうとか、そんなことは遠くに置いておいてはじめは頑張った。目的はただ一つ。茜とまた秘密のお茶会をしたい。そんな願いがはじめのやる気に火をつけていた。

静まり返った教室の中で、やたらと気合の入ったペン音が響いていた。

〜〜〜

学生寮3号棟　はじめの部屋。

「で、そんな気合いれて臨んだテストの自己採点はどうだったんだー？」

部屋に備え付けの小さな浴室でシャワーを済ませたはじめは、濡れた頭をガシガシと拭きながら出てくる。適当なTシャツとハーフパンツというラフな寝巻きを着ていた。ちなみに岡本は水色地に白い水玉の長袖パジャマを着ていた。似合わないを通り越して少しきしょいがわざわざはじめはそれには触れない。

「上々。茜が言うように、俺は生前の頃成績がよかったのかもな。そういう岡本は？」

「俺はまぁヤマがそこそこ当たったのと、事前にはじめに教えて貰ったことが出てきたから、わりと良いかもしれん。」

「そーか、それはよかった。後期は支給額上がるか？」

「たぶんな。」

「みんなはどうだったんだろうな…同じクラスじゃないから勉強面はよく知らない。」

岡本はあごに指を当てて考える。ポーズと服が全く不釣合いだが、そこにツッコミは入れない。

「んー。俺らの中じゃ、まず石田と柊と森が上位。んで茜と三浦と中野が中堅、関根と風間と俺がドベ３ってとこだな。」

「…判るような気がする。」

「ん、石田が上位ってことに驚かないのか？」

「前に茜にそう聞いた。」

「…そうか。」

「ん？」

「いや、ちょっと驚くかなって思ったんだが…。」

「わあおどろいた。」

「遅い、っていうか全然驚いてねーじゃん。」

「まぁ知ってたしな。」

「つまんねーやつー。」

「でも以外だよな。あの風貌の石田が成績良いなんて。」

「もともと出来はいいみたいだからなー。ちなみに関根は成績が良くないから月末になると金が底を尽きることが良くある。そうすると石田がそっと食券を渡すんだよ。俺たちにバレないようにしてるみたいなんだが、どう見てもバレバレでさ。ほんとに兄妹みたいで微笑ましいんだ。」

「ほー、見てみたいな。」

「あいつは中野にも風間にも優しいけど、関根だけはもっと特別だからな。まさに溺愛って感じか。」

「妹さんを重ねてんのかな…。」

「まぁそうだろうな。ま、人にはいろんな人生があるってこった。…そろそろ寝ようぜ。最近夜更かしが過ぎて、眠い。」

「そうすっか。」

消灯時間までまだあったが、はじめはパチとスイッチを切る。

もぞもぞとベッドに入り込んで、すぐに寝付いた。

〜〜〜

後日。

教員棟一階、職員室。

自分の事務机に付属するキャスター付の椅子に深く腰を落ち着ける担任と、隣にある椅子を薦められたが断り、立ったままのはじめが対峙している。

慣れない職員室だからか、はじめは緊張気味に手を体の前で組んでいた。担任は背もたれに身を預け、やや踏ん反り返った体勢ではじめにプリントを手渡す。

「というわけで、天野。今回のテストの成績や日々の態度を鑑みて、君に対する待遇が上がる。詳しくは生徒手帳にも書いてあるが、とりあえずこれを渡しておく。」

そのプリントには「寮室移動願」と書かれ、他にも細かく注意事項などが書いてあった。はじめはそれを神妙な面持ちで受け取る。

「期日は今週中で、移動は週末になる。ぱっぱと済むように荷物はまとめておけよ。…ん？」

説明を続ける担任に、はじめはプリントを返す。

「すいません。俺、今のルームメイトが気に入ってるので、1人部屋には移りません。」

担任は驚きながらプリントを受け取り、

「それは珍しいな。大抵は喜んで受け取るんだが…。…友達なのか？」

「…はい。大事な友達です。」

はじめの返答を聞いて、担任はうれしそうに頷いた。

「そうかそうか、なら大事にするといい。友達は一生ものだからな。

じゃあこれは権利を破棄したものとして処理しておく。戻っていいぞ。」

「はい。失礼します。」

職員室を後にし、後ろ手でドアを閉めるはじめをみんなが迎える。岡本だけが、少し照れくさそうにそっぽを向いていた。

はじめはそんな岡本の手を強引に握る。

「これからも改めてよろしくな。」

「…あいよ、相棒。」

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1133o/

[key] Angelbeatｓ！　～ｉｎｔｒｏ～[二次創作]

2011年10月8日01時19分発行